



cover image
by Kohya. I

Obitouge

僕は全速力で階段を走り降りていた。背中のザックの中の着替えや食料だのはすべてごぶごぼという音をたてて飛び跳ねていた。それは全てきちんと必要になるであろう順番に詰め込まれていたのだ。極めて高度な整理された状態。そしてリセット。なにもかもはそんな道筋を通らなくてはならなかった。それは、その頃の僕に違いなかったのだ。

発車ベルは僕が電車の一番近いドアにたどり着く寸前に鳴りやんだ。僕は車掌に向かって手を振ろうと列車の後方を見遣ったが、ホームのどこにもその姿は見えなかった。未だ平気だ、と僕は駆けるのを止め、大きく息を吐き出した。その時列車はがくんという音をたてて走り始めたのだ。僕は、列車が走り始めるのを列車の外から見ていた。けれども結局のところ僕はなんとか列車に乗り込むことが出来た。列車は走り始めたのだがドアは未だ閉まっていなかったのだ。緑色のいも虫のようなその列車のドアは、僕が飛び乗った後にゆるゆると閉まった。車内は早朝のせいか客は少なく、行商に出かけるといったふうの桑折を持った婆あさんの三人組と釣りの支度の赤黒く日焼けした男達のグループ、それと、ぱらぱらと眠りに入ってしまった人形のような人達が数人いるだけだった。僕はそんな人達を避けて、空いているボックス席の窓際に座った。この駅までの列車は競輪があるせいか随分と込み合っていたから、やっとのことでゆったりと過ごすことが出来そうだった。僕は昨日の残りもののフランスパンとチーズを食べることにした。走ったせいで消えかかっていた昨夜のビールが上がってきた。コーラをパンとチーズでもさついていた口の中に流し込むと僕は椅子に深く腰掛け直した。僕の座席からは運転席をのぞき見ることが出来た。ライトグリーンのジャケットを着た運転手は、どういうわけか立ったまま運転していた。列車は時折ふあんという警笛を鳴らしながら街並の中へ走り進んでいった。

列車は最初の五、六分はゆっくり走っていたが、急に減速して大きな段差をがんと音をかき消し、窓枠やドアがびりびりと震えた。列車は周期的に左右上下に大きくゆさ振られ始めた。窓の外は列車を通すだけの幅を残して家々の軒先がせり出していて、目に入る全てのものは流れてしまっていた。さながらジェットコースターに乗っているようだったそれでも列車は容赦なく加速を続けた。列車の中は轟音に包まれた。中型の貨物船の機関室だってこんなには騒がしくないだろうと思えた。加えて、悪路をぶっとぼして行くおんぼろのトラックのように全てが揺さ振られているのだ。列車は一時も真っ直ぐ走ることなく、右に左にと引っ張られ続けた。そんな乱暴な列車の中でも通路越しに見える他の乗客達は、にこやかな表情のまま大声で話し続けていた。もっとも、この線路は石材の輸送用にひかれたと云う話を聞いたことがあるから仕方がないのかもしれない。僕達は石になったつもりで座っているべきなのだろう。やがて、列車は街並から抜け出て広い畑の中を直線的に進むようになった。列車はもう加速してはいなかったが、振動と騒音は相変わらずそのままだった。それは僕の体の中に染み込み続けていた。ザックの中にはウオークマンとラベルのテープが何本か入っていたけれど無力だった。せめてルイスニュースを持ってくるべきだった。時計は七時をまわったばかりだった。列車の外は穏やかなそして特別に静かな朝の田園が広がっていた。体に残っていたビールも、その景色に吸い込まれるように飛んでいった。眠くなった。まぶたの中の暗闇の遠くからトンネルの中を走る列車の音が聞こえた。夢の中で、昇ったばかりの太陽がラップのリズムでがなりながら踊りまくっていた。太陽

がひととき大きな声で「ててててっきょうだぜぜぜえい」と怒鳴ると、遠くで列車が鉄橋を渡る音がした。

一時間ほども眠っただろうか。喧噪をはるかに上回る爆音とでも言うべき車内放送で目が覚めた。「まもなく、うろこ石に到着しまあす。」二回繰り返されたそれは学校の校庭のスピーカーから発射される声を至近距離で聞いているようなものだった。いつしか列車は森の中を走っていた。うろこ石はそんな森の中の小さな駅だった。操車場の跡のような広場があり、乗客達は電車からぱらぱらと跳び降りた。この駅から乗り込んで来る人は居ないようだった。小さな駅舎以外には建物もなく、その向こう側はすぐに森が続いていた。降り立った人達は駅舎を抜けると森の中に消えていった。森はどこを見ても同じ種類の木から成り立っていた。背丈が五メートルくらいしかない針葉樹の森だった。木の幹は背丈の割りに太くコメツガの様な葉をびっしりとまとって森の中を暗くしていた。下草はどれも同じ緑色をしていて、妙に落ち着きのないモノトーンワールドを造っていた。列車は、全ての景色がくっきりと見える程にゆっくりと走った。線路は森の中をまっすぐ伸びていた。線路のたもとを見ると、あちこちに水溜が見られた。どうやらこの森は湿原の中にあるらしかった。地表は厚みのある色鮮やかな苔に被われていて、緩やかにうねる地面の低いところには、小さな池がたくさんあるようだった。その水面は気の遠くなるような静寂の中に置かれているのだろうか、かすかにも揺れるこには四つの駅しかなかった。僕が乗り込んだ駿津、うろこ石、おびとうげ、そして終点の弓浜だった。弓浜には有名な石切り場があった。そこでとれる石はどれもガラス状の結晶を含んでいて庭石として今でも引合いが多かった。列車を降りても、ごおんという耳鳴りが残っていた。その余韻は僕の聴覚に居残っていた。というより僕の体の隅々に居座ってしまったかのようにも思えた。それ以外の何も聴こえないような感じがした。草が生え放題の地面に二本の足で立ってはいたけれど、暫くは五感が頼りどころを失い、バランスを崩して勝手にさまよっていた。列車に揺られ、騒音のシャワーを浴びていた筋肉は、うとうととしか眠ることの出来なかった夜を過ごした後のように、意味のない緊張の中にあっただ。けれども数分もすると、自然とさまよっていた五官が体の各部分に吸い取られるようにリセットされて、腕を動かすにしても随分と軽やかに感じられるようになった。その場で試しに飛び跳ねてみたが、ジャンプしている時間がとても長く感じられた。まるでセロに入って病気を治して貰った鼠のような気分だった。おびとうげで降りたのは僕だけだった。列車が行った後に残ったのは背の高い樹の壁に仕切られ、細長く続く空だった。列車の中で僕の体に浸み込んだ騒音は、五官の復帰と入れ替わりに空に吸い込まれるように抜け去って行った。とはいうものの、僕は、自分の耳が、聴こえているのかいないのかすら分からなくなっていたようだ。しばらくして、大きく息を吸い込むと、はじめに心臓の鼓動が遠くで聴こえ始めて、ゆっくりと、ささやかな森の音が僕に戻ってきた。僕の周りの音というのは全てが僕の周りであるのではなく、そのうちの幾らかは僕自身の体の中に組み込まれているんじゃないか、そう思えた。自分の声や心臓の鼓動だけじゃなくて、ちょっとした生活の音を僕達はきちんと持ち歩いている。それは聴覚器官に組み込まれていて、それ無しでは捕まえようと思ったとしても音は僕達を通り過ぎて行ってしまふのだ。列車の騒音はそんな組み込まれた音をも壊していったような気がした。そして今、僕は再び自分に音を組み終るところにあった。リセットは完了したのだ。僕は声をあげて（それが大分大声だったか、弱々しい声だったのかは分からない）「おびとおげ」と発音して

みた。あんまりいい声じゃなかったけど、それは確かに僕の声だった。

心地よい風が頬に当たるのが分かった。僕はトリさんが描いてくれた地図を取り出して辺りの様子と較べてみた。トリさんの描いてくれた地図は大まかに、森、線路、駅、看板という四つの要素が幕の内弁当のように描いてあった。人の描いてくれる地図というのは、大概、個人的単純化によるものだけれど、この地図はまさに現実その通りだった。森は地図の中でも実際にもシンプルに森であり、シンプルでないものはここではなかった。僕は靴の紐を締め直し、タオルを首に架けて歩き始めた。雲のない晴天だった。晴天というにはあまりに遙かな宇宙がそこにはあった。そしてそれよりずっとずっと宇宙は僕を見ていたに違いない。僕が見られていること、それが真実なのだ。僕は辺りを見ていた。目の前に続く小道や丈の低い針葉樹の森、線路を。でも、それは嘘だった。僕はやっとのことで見も森も小道も僕を見つけてくれたのだ。僕は僕に用意された何か、しっかりとそこ在るのを感じとっていた。僕の五官は僕のものになった。僕は歩き続けた。おび沼への道は森の中の一本道だった。やがて針葉樹はまばらになり、辺りの樹々はどれも透き通るようなうすい緑色のふくよかな葉を繁らせ、柔らかな陽ざしが辺りを包むようになった。ところどころそんな緑色の屋根が途切れているのだろうか、強い陽ざしが地上に差し込んでいて、一人で歩く自分には心強く思えた。そんな、単調でもある景色の中を小一時間ほど歩いたのだろうか。道が二股に別れた。トリさんに教わった通りに右へ進めば沼まではあと三十分程で着く筈だった。僕は休みをとらずに沼まで出てしまおうと思ひ、歩き続けた。

僕は病院での毎日をこんな散歩ではじめていた。僕は人よりもだいぶ早起きする習慣だったから、朝食の前に少なくとも一時間半は散歩をする時間がとれた。病院の前の国道を街へ下り、小川を渡る手前で脇道に入る。脇道は笹の生い茂った山腹を巻くように登り、丘の頂に出た。頂上とはいっても丘全体がドームの様な形をしていたから、どこが丘のてっぺんなのかがはっきりとしていなかった。そこからは遠く下方に海を見ることが出来た。病院の前の国道は海辺りにある街に吸い込まれていた。丘の頂きからはずっと病院を見下ろしながら戻る事ができた。僕は熊笹の拡がる斜面に上半身を突き出すようにして散歩道を歩いた。何だか自分自身を曝して歩いているような気分がした。僕はこの散歩道を同室の男から教わった。彼は髪が真っ白になった初老の大男で、どういった理由でここにいるのだから細かいことは僕には良く分からなかったが、なんでも無意識のうちどこまでも歩き続けてしまう癖があるということらしかった。僕は彼が病院に居る間、毎朝二人で散歩をした。彼はかなりのスピードで歩いた。歩くのが好きでたまらないのだと彼はよく話した。彼は、散歩道がお決りのコースどうりに車道から外れるところまで来ると、必ず「ここを左に外れることを忘れてはいけません。」と言うのだった。僕が「もう少し下りて行ってみましょうか。」と言ってもそれは必ず制止されることになっていた。彼にとって、その場所はとても大きな意味を持っているらしかった。僕はその理由を尋ねようとはしなかった。というより、歩きながら僕達はあまり話しをしなかった。彼があまりにも速く歩くからそんな余裕がなかったのだ。それに僕はあまり喋るのが好きではなかったから、そのことは好都合だった。彼は毎朝、散歩の前に部屋で軽く準備体操をして、しっかりと身支度を整えた。手軽なジャージ姿で出かけるようなことはなかった。普通は厚手のグレーの毛のズボンと鮮やかなグリーン của ラガーシャツ、寒い時はその上に薄茶色のフィッシャーマンセーターという姿だった。そして頭には小さなひさしの付いたエンジ色の帽子を被っていた。それはまるで何かのポスターに出てくる紳士のようにも見えた。僕はいつも決めて濃いグリーンのトレーナーに明るいグリーンのスウェットパンツという格好かもしれない。僕達は、雨が少しでも降ると散歩を取り止めた。梅雨時の彼は、散歩の出来ない日が長く続くと、相当堪えているように見えた。医者はそれを察知して、雨降りが続くと僕達の部屋にやって来て、朝の6時をまわったばかりのしんとした部屋の中で昼休みにでもするような世間話をひとしきりするのだった。僕はそんな時は図書室に行って適当に暇を潰すことにしていた。山の中の病院にしては不思議と大きな街の図書館のような本までもがきちんと揃えられていた。例えば「化学工業における配管設計と粘性液体」などというような本を当り前に見つけることが出来る。「DNA修復について」「実習ガラス細工」等々。ある意味ではどんな本があるかということよりも誰が読むのかということの方が遥かに興味をそそられる事柄だったが、一日を通じてここを使う人はそう多くなかったのだ彼が居なくなった後も僕は歩き続けた。彼は梅雨が終り切るのを待たずに突然居なくなってしまったのだ。彼の荷物は引越し屋の手によって、完全にそれも一瞬のうちに梱包されて消えてしまった。僕はひとり、少しくらいの雨なら、傘をさして歩き続けた。

散歩から帰って朝食が済むと、僕のように病院から出て仕事をする事が出来る連中はバスに乗って街に出ていく。僕は病院の紹介で小さな造園業者のところで働いていた。痩せて黒ぐろと陽焼けした五十過ぎの社長と、彼と歳のそんなに変わらないだろう老練の庭師が三人、それぞれの下につく若い人夫数人がグループとなり、合わせると二十人近い働き手が居たと思う。仕事はグループごとに、時にはそれを合わせて行われていた。僕は特に、早出をしたり残業をすることが出来なかったで、どこのグループの専属ということなしに、日によって仕事場を、仲間を変えて（そして時には一人で）仕事をしていた。特別な知識や技術があるわけではなかったから雑用が僕の仕事の全てだった。危険な作業（何トンもある庭石の移動みたいな）では、僕は全く信用されていないらしく、必ず外された。代わりに人が持てる程度の重い荷物をたくさん運ぶ様な仕事は必ず僕にまわってきた。多かったのは掃除や後片付け、あるいは石研ぎとか芝刈り落葉拾いだっただ。どれもが単調な仕事だった。そして、僕は単調に仕事をした。僕は指示を確認したり仕事のやり方を尋ねる以外にはあまり人に話しかけるということをしなかった。大抵は周りの連中は僕が病院から通っていると聞くと、余り構うことをせず放って置いてくれるのだった。僕は昼の間のその時間を、砂の積木を重ねるように意味なく過ごしていた。むしろ、それは手のマメや筋肉痛や汗臭くなった衣服のようなものだった。隅ずみまで同じ長さに切り揃えられた芝生の庭、あるいは落葉のぎっしり詰められた麻袋の山。仕事は四時で切り上げられ、大抵の場合僕だけがバスで事務所へと戻るのだ。病院へ戻ると、その日にあったことなどを医者に話す時間が毎日とられていて、それが僕に取っての治療ということだった。時折、暑さが厳しかった日には帰り掛けに缶ビールを一二本飲んで戻ることがあったが、僕はアルコール依存ではなかったから取り立てて怒られることはなかった。仕事をすることはとても楽しく感じられた。親方は、人手が足りていれば病院から通うような奴を雇ったりはしないと公然と言い放つ人間だったが、それは僕ば、同じ様な言葉は誰からも発されなかったし、それはそれで完結してしまうのだった。僕はそういった意味では親方に感謝してもよかった。病院へ戻ってきて話すことは、はじめはそんな仕事の話しに終始した。仕事は単調な作業の繰り返しだったから、話しも単調な繰り返しになった。けれども、仕事と違ってその繰り返しはどうにも耐えられないものだった。苛々する僕とは対照的に担当の医師は穏やかに忍耐強く僕に話すことを要求した。会話療法と呼ばれるそれは、むしろ僕が怒り出すことを狙って行われているのじゃないかとさえ思えた。

何カ月かの後に、僕は自分自身の治療法に対する疑問を努めて冷静に尋ねた。蝉の声が未だ鳴りやまない、風が吹き止やんでしまった夏の夕方に、僕はノグチという担当医に言った。「僕自身は良くなっているのでしょうか。僕は僕自身の身の置場を求めてここへ来たのですが、それが目的という訳じゃありません。僕は僕自身に気が付いてここへやって来たのです。おかしいんじゃないかって。」「そうですね。あなたは。無理矢理ここへ来たのではない。」そう言うとノグチ氏はゆっくりと煙草をくわえて火を点けてから続けた。

「あなたの苛つきはもっともなことです。しかし、こういった心の問題は現象面だけ、つまり物忘れをし過ぎるという点を論じるだけで、それを理解するのは困難です。むしろ日常的なあなたのストレスや、あなた自身の解放という点について、私達はあなたを観察し、理解することからはじめています。・・・もう少しはっきりと言うとね、あなたは未だ忘れ続けているのですよ。例えば僕が聞いただけであなたはもう数十回は食事を摂ることを忘れていて。ここへ来ることも数えられないほど忘れていてのです。」僕には全く覚えのないことだった。僕は、きちんと毎日ここへ来ていた。「意外でしょう。まあ、それ以外に今のところ不都合は起こっていないんだが。」ノグチ氏は無表情に続けた。

「君に聞いた話しをチェックするつもりじゃないんだが、時折、何か問題はないかと、ええと、君の場合は花指園芸だったね、そこへ行ったりもしてるんだ。気分を悪くしないで貰いたいんだがね。・・・全く良く働いている。ただね、この間、君が夕食すっぽかした後にね、図書室へ僕が行っただろう。その時、君、今日の夕食はとても美味しかったとはっきりそう言ったんだよ。まあ、そう気にすることはないよ。普通はこんなに直接的に言ったりはしないんだけどね。そのつもりでね。・・・しかしだ、そういう物忘れがね」と彼は言いかけて、苦しそうに咳払いをした。彼が再び僕の方を見た時、ほんの一瞬ではあるけれど、僕はその目に睨みつけられていた。それは何もかも凍りつけてしまいそうな目だった。けれども、それはすぐにいつもの穏やかな目に戻った。僕は何かを言いかけたのだけれど、言い出せなかった。

「しかしだ、そういうことがどこからやって来るのかを君に考えて貰うきっかけが見つからないんだ。今のところね。」

彼は続けた。

「実際、君はとても上手くやっているんだよ。完璧といってもいい。そして、君は君自身が良くなろうとする意志においてもだ、完璧なんだ。」僕は大きくため息をついた。「君の問題はかなり深いところにあってなかなか姿を見せないのかもしれないね。」「しかし、少しだけの前進でも僕には必要ですね。」と、僕は言った。彼は暫く考えていたが、こう言った。

「ああ、それじゃあだ、少しだけやり方を変えることにしようかね。ただ、約束して貰いたいんだけど、僕が尋ねることについて、出来るだけ詳しく一生懸命思い出して欲しいんだ。ひょっとしたら、とても遠い昔のことを聞かなくちゃあいけないからね。」僕は構わないと答えた。その日はそれでおしまいだった。部屋を出る時に、今度僕がそこへ行くのを忘れたらカレンダーに丸をつけておくから、時々見ておくように言われた。ノグチ氏との面談は翌日から、昔のことを聞かれて僕が答えるという形式になった。僕は自分の行っていた学校や友人のこと、好きだった女の子のこと、何をして遊んだかという様なことを尋ねられた。ある時は、雪の降った日はいつかといった時刻をも求められた。僕は約束通りに努めて出来る限りのことを答えた。同じ質問を何日かに渡って繰り返されたこともあった。例えば、僕がはじめて盗みを働いた時のことは、うんざりするくらい繰り返して聞かれた。自分が小学生の時に他の子の教科書を盗み、それを隠すために結局はその教科書を夜になって燃やす羽目になった時の様子を僕は三度も繰り返して詳しく話さなければならなかった。勿論、忘れてしまって記憶の桶から取りだしようのないことも沢山あった。

僕がかみさんに愛想をつかされて出て行かれた頃のことには特にそうだった。その時点で僕の物忘れはかなり酷くなっていたから、問題があるのならそれよりも前の事なのだろうと思えた。なにしろ僕は気がついた時は物忘れの激しい少年だったのだ。もっともかみさんと別れた頃はもう激しいといって済ませられない程ひどくなっていたから、僕がかみさんとの経緯を詳しく思い出そうと努力した。けれども爆薬と起爆装置は違うのだ。ある日の夕方、僕はそういった考えをノグチ氏に話しててみた。彼の反応は基本的に僕に対する同意からはじまった。「確かに、それが源泉とはいえないようだね。」と。そして、その時僕ははじめてノグチ氏の変調に気がついたのだ。いつも通りに西陽の射す診察室に穏やかに響いていた彼の口調は段々と強く攻撃的に変わりつつあった。「あなたの話しにはまったくの嘘というものがありませんでしたよ。後悔しているのですが、それについて私はある種の怒りすら感じているのです。」唐突な反撃が続いた。「人の記憶なんて感情であるといっているのです。記憶はその時の感情のみならず、現在の感情の仕業です。感情が記憶され、感情をくぐり抜けて再生される。」

彼はことごと湯呑茶碗を置いて、あの時の凍りつけるような目で僕を見ていた。

「それじゃ感情とは何かね。嘘だよ。不条理とか、整合性がないといってもいい。私はね、そういう話を聞きたいんだ。でなけりゃね、私があなたの前にいるってことに丸きりの意味がないんだよ。」彼は勢い良くそう言い放つと、少しぶるぶると震えながらこちらを見つめていた。僕は何と答えてよいか分からず、黙っていた。長い沈黙だった。それは僕がここへ来てはじめて受ける大きな圧力だった。それでも、僕の心の中では新たな治療のはじまりなのかもしれないという予感が端の方にあった。僕は洗い流されるのかもしれないと思った。随分と長く黙っていた気がしたけれど、彼がその場を終りにさせた。「私もね、少し疲れたから今日はもう終りにしよう。でもね、もう少し取っ掛かりをくれないかね。いつだって同じ答えだよ。同じ話しだ。こっちも滅入る。」と彼は言い捨てた。僕は部屋を出た。カレンダーには丸は付けられていなかった。会話療法は次の日もその次の日も行われることがなかった。僕は自分が小さくなってゆくのを感じた。部屋に閉じこもって動けなくなってしまうのではないかと思えた。仕事には出かけたが、散歩はしなかった。結果としてそれは治療の一環ではなかった。というのも、職員達が立ち話をしているのを聞いていると、ノグチ氏はどうやら病院に来てもないらしいのだった。

更に十日ほど経つと僕は別の医師から呼ばれたのだった。彼は手短にノグチ氏が当分の間登院しないこと、病院も医師の手が足りなくなるので院外作業が可能な入院者には一時的な退院を勧めていること、それに係わる費用は払えないが代わりに治療費を割り引くことなどを伝えた。少なくともそこで居残ることは最悪の選択である筈だった。ただ、僕には差し当たって還るところがなかった。僕は退院することには同意したが、落ち着き先が決るまでは病院に留まる事を許して貰えるように頼んだ。そして翌日はいつもより一本早いバスで街へ向かった。僕が義理を立てるとすれば、そして後始末をしなくてはならないのは、それまで働いていた造園業者にだけだった。親方の反応は意外にも辞められるのは困るというものだった。僕は病院を出なければならぬのだと言った。すると、彼は家を借りれるくらいに給料を上げて構わないのだと僕を引き留めた。仕事は気に入っていた。結局、親方の知合いの不動産やを紹介され、当面のお金を用立てて貰って僕はそこで働くことにしたのだった。その日のうちに街の端にある漁港の近くにアパートを借りることを決めた。うす汚れたアパートの一階で間取りは2Kだったが、家賃は安く風呂も付いていたので文句はなかった。唯一の問題があるとすれば、それは道沿いに拡ろげられた天日干しのひものから出る臭いとそれに群がる蠅の多さだった。窓からは道を隔てて見下ろせるところに魚市場があり、市場の広い屋根の向こうには漁港の海面がキラキラ光って見えた。僕はその晩には病院から荷物を背負ってアパートに移り住んだ。翌日から、僕は会社まで歩いて行き、そこからは会社の車に乗せられて、時には一人でバイクにまたがり仕事に出た。

僕はかなり遠い現場まで連れて行かれた。相変わらずどれかのグループに所属することなく一人だった。仕事が終わるまで働き続ける事は以前に較べてかなりの疲れを僕の体に残したが、それは逆にある種のリズムを受け入れることでもあった。何がどうとはいえなかったが、僕はそのリズムに少なからず助けられた。何だか自分の暮らしが支えられているように感じられて嬉しかった。

街に秋風が吹抜け、山の樹木の葉は少しづつ落ちはじめていた。街の南の山裾には古くからある別荘地が広がっていた。花指園芸はその別荘地でもっているようなものだった。そんな別荘のどれもが、一斉に秋を迎えているのだ。仕事は多忙を極めた。終えるべき剪定も済んでいなかった。暫くの間、僕は職人達とは別に仕事をするようにいわれた。車を一台与えられて、日に何軒か分の落葉を集めては事務所脇の焼却炉で燃やすことを繰り返した。園芸屋とはいっても、実のところ僕の仕事は別荘地の掃除人だった。秋は深まっていき、僕は果てしない落葉拾いの中にいた。掃き集めるそばから、葉が落ちて積もっていくのを見ながら、僕は取り敢えず始めなくてはいけないからと自分に言い聞かせて仕事を続けた。親方は「やったってことが大事なのよ。まあ、適当にやるしかねえな、この時分は。」と言った。けれども、実際のところ僕にとっては掃き集めることが目的であって、その後には何もなかった。僕には、むしろ、奇麗になった庭ではなく袋に詰められた落葉の量が糧なのだ。だからこそ、別荘の敷地を掃いて行く作業はとても楽しく思えた。僕は人気のない別荘の庭で黙々と汗を流し続けた。

北の季節風が吹きはじめる頃には、そんな落葉掃きは終りに近づいていた。事務所に戻ってから落葉を燃やす必要もなくなって、仕事帰りに買物をするだけの余裕もできていた。漁港が近いというのは新鮮な魚にありつけるということでもあった。漁師のように生の魚をぶつ切りにして茶漬けにしたり、そのままご飯の上に盛って鉄火丼のようにして食べた海に近いということが生活の中に染み込んで来るようだった。旨い焼き魚を食べさせてくれる喫茶店を見つけた。その店は一応喫茶店だったが、市場の中の建物の並びにあって、道に面した入口から吹抜けになっている裏口が見え、その向こう側は港の内側の海だった。元は船員向けのスナックだったという店の中には、雑草のような植物が植えられたプランターがところ狭しと並べられていた。丈の大きな物は一メートルはあって二十畳程の店の中には青臭さがたちこめていて、草むらの中に座っているような気分になった。店の名はジャングといった。ジャングルというには雑草のような草ばかりで、そのくせどれも冬だというのに枯れもせず艶やかな青を保っていたから、これは温帯に於けるジャングルの姿なのかもしれないと思うくらいだった。

ジャングは市場の活気が収まりかける朝の六時過ぎに店を開ける。店の中は、早朝から魚臭い、番号札のついた帽子をかぶった大声の男達で賑わう。喫茶店というより朝定食屋という感じで、皆んな焼き魚にライスと味噌汁といった食事を取っている。僕も何度かここで朝食を取ったことがあるのだが、鯛の茶漬けは気に入りのメニューだった。ジャングがケーキや紅茶の似つかわしい喫茶店になるのは昼を過ぎてからだった。そして、時計が午後の三時をまわれば、店の外にも内にも市場は姿を消してしまうのだ。店は何時までという決りもなく適当に閉められるのだが、夕食を食べようとすると、僕は仕事を早く切り上げる必要があった。逆に看板さえ出ていれば、トリさんは嫌な顔ひとつせずに注文を取ってくれた。僕は鯛茶漬けもそうだったが、ここの生姜スープが気に入っていて、必ずそれを頼んだ。

トリさんは背丈が百九十センチはあろうかという細身の大男だった。厨房ではいつも市場の人達がつけるゴムの前かけをしていて、その下は夏は短パン、冬はジャージをはいていた。時々手拭を海坊主かぶりし、冬でもゴム草履をはいて仕事をしていた。歳は僕と同じくらいで、三十五、六といった感じでやもめ暮しだった。彼は「はいOK」というのが口癖で注文には必ずそれで応えた。彼は気分が良い午後にはBGMとは思えない音量でルイスニュースを流した。二十代の頃、僕はリラックスしたいと思うと決めてルイスニュースを聞いたものだった。それが僕と彼との共通点といえた。持っていたレコードは病院に入る前に全て捨ててしまっていたから、市場の前を疲れて歩いていて、ルイスニュースのハート&ソウルが聴こえてきた時は、あの少ししわがれた声が体の中にじゅうじゅうとしみこんできて堪まらずに店に入ったのだ。店には一人の客も居なかった。それはかなりの音量だったので、トリさんは僕が入ってきたのに気付かずに狭い厨房で体を揺すりながら食器を洗っていた。僕がトリさんの斜め前のカウンターに座ると、彼はやっと気が付いて泡だらけの手でボリュームを一気に下げて、これは失礼というようなことをいった。僕はこれが聴こえたんで店に入ったのだと言った。僕達はビールを二十本は飲んだと思う。へべれけになった。僕達はワーキング、オンナ、ティンラインとサンフランシスコ、ラブ、ソングとトゥルー、ラブを続けて聴いた。トリさんは厨房の中で踊りまくり、最後は二人で怒鳴るように歌い続けた。その夜、街は土砂降りの雨に見舞われた。激しい雨が止みかけた頃に、僕達は店を出た。その時は、互いの名前さえしらずに別れた。世の中がぐるぐると回っていた。そんなことがあって、僕はジャンゲに時々顔を出すようになったのだ。

十二月になると、僕は園芸屋らしく木の幹に藁を巻いたり、枝の剪定をしたり、砂利を敷き詰めるといったような仕事をするようになった。僕は後々役に立つ庭の手入れの仕方を、ほとんどこの時に覚えた。職人達のグループに入って仕事をするようになり、気が付くと僕の知らないうちにグループの頭にあたる年のいった三人の職人のうち、二人が辞めてしまっていた。僕は残された若い連中がだらだらと仕事をするのと一緒に仕事をした。親方は時折やってきて、仕事の指図をした。僕は一生懸命仕事をしようとか、手を抜かないようにやらなければいけないとは更々思っていなかったのだが、僕自身のリズムと若い連中のリズムとは余りにかけ離れていて、それが苦痛になってきたように思えた。

年を越えても親方は新しく人を採ろうとはしなかった。彼は若い連中の時代になるんだというようなことを幾度も口にしていたが、連中は結局のところ彼に応えようとはしなかったから、花指園芸の仕事の質はかなり悪くなったと思う。世の中の景気が落ち込んできたのと同じくして、何もかも丸抱えで引き受けるような仕事も少なくなっていった。じきに若い連中もぽつりぽつりと辞めていき、会社は随分と小じんまりしたものになってしまった。そして、僕に対しても、仕事をもっと覚えて園芸屋として一人前になろうとするのか、辞めるかという選択がやってきたのだった。僕は親方に世話になってきたことに対して感謝していた。けれども、僕は決定的に他の人を扱えるような立場になり得なかったし、そのつもりもなかった。僕は、出来るなら仕事は続けたいということと、同時にいつまでも使われる状態でいたいのだと答えた。僕は落葉拾いや芝刈をするのはとても好きなのだと言った。親方は「残念だがな。」と言うと、僕を引き留めようとはしなかった。彼は、僕が辞める時になって二十万円ばかりのお金をよこした。そして、こう言った。「うちじゃあもう、雑用みてえな仕事は取らないことにしたからな。もしなあ、そういう仕事がよけりゃ、家借りた時の不動産屋、ええと、城硝リゾート、行ってみな。あそこ、そういう仕事、結構抱えることになる筈よ。・・・まあ、元気で、な。」

それは、大分迷ったんだけど、もうこれからはこの方針でいくんだと決めたような決意が込められたような口調だった。

僕はとりあえず、この先どうしたものか、ゆっくりと考えることにした。病院を出たことを境目に、僕は自分のペースを造りはじめているとあってよかった。それを崩さなければ何をしても良かった。トリさんは知っている人がいるから船に乗ってはどうかと声をかけてくれたが、生憎僕は船酔するたちだった。ただ、僕はこの街を離れようとは思わなかった。この街は緩やかな時の流れを持っていた。それは、ここが別荘地という休憩の街の入り口だったからかも知れなかった。海水浴客たちはこの街を通り過ぎるだけだったから、夏休みでも、駅を外れば人群を見ることはなかった。

人群は決して休むことがない。それが消え去ると人々はこの街の入り口に立てるのだ。急いた気持ちがあっても、それはどこに跳ね返るでなく街に吸い込まれて行ってしまいうのだ。僕はそんな街がとても好きになっていた。

僕が花指を辞めてから三日後に、城硝リゾートから電話があった。

「もしもし、城硝のオオエですが。社長から聞いたんだけど、あんた辞めたんだってね。それでね、社長、言っていたんだけど、あんた、別荘の手入れやってくれるって？」

「ええ、そういう仕事しては見たいなって思っているんですけど。」

「今ねえ、うちも困ってるんだよ。正直な話しさ、不景気じゃないの。あんまり高いところに管理任せられないんだよ。うちみたいな小さな不動産屋はさ……。で、やってくれんだったら頼みたいのよ。」

「ええ、僕は辞めちゃったわけで、これからどうするか、今考えてるところなんです。」と、僕は答えた。

「じゃさ、電話でもなんだからさ、ちょっとこっち来ない？……。な。」

僕が城硝リゾートの事務所に顔を出すと、やって貰いたい仕事の話しが機関銃の玉のように出てきた。結局僕は、それを引き受けることにした。門柱や柵の修理から潮で真っ白になった窓拭きやらそういった仕事だった。僕は親方から貰った金で、一揃いの掃除道具や大工道具を買ってしまい、暫くは城硝から車を借りて仕事をすることにした。一月働いて幾らの金になるかすら想像できなかったが、僕には都合の良い仕事だった。僕は日給で給料を受け取る約束をした。仕事がなくなってしまう日もあったりして、月にすると年金でもなけりゃ苦しいくらいの収入しかなかったのが、僕は時々日雇いの道路工事の仕事に出たまあ、スタートとしては苦労もなくラッキーだったと思う。暫く経つと他の小さな不動産屋からも声がかかったりして、その年の春には金銭的には余裕のある状態になっていた。

夏休みを目の前にして、別荘地がささやかな賑わいを迎えようとする頃には、僕は自分の仕事を小さな会社にしてまとめ上げようと思っていた。そして、少し面倒だったが住民票の問題やらを片付けて、会社は出来上がってしまったのだ。錆だらけで床に穴が空いているような状態だったが、中古のジムニーを買うことも出来た。僕はトリさんのアイデアで別荘のポストに何でもやりますというちらしを配った。雑用を安く引き受けたせいもあるけれど、あっという間に八月までのスケジュールは一杯になってしまった。

この街の別荘地は大まかにいうと、街の背後にある山の斜面の地区と古くからある山麓の小さな湖の周辺の地区、そして山から流れ出た溶岩が造った海沿いの台地の上にある地区の三つに分けられた。湖の周辺は大手のリゾート開発会社が管理まで一手に引き受けていたが、建物はどれも古く、そういったところや管理会社からも仕事はまわってきた。僕は好んで簡単な修繕を引き受けた。勿論造り直したり、木を植えかえるなんていうことは出来なかったけれど。仕事に慣れてくると、外から様子をうかがっただけで、その別荘に最近人が訪れたかどうかさえ分かるようになっていた。そして僕は人のいない家を訪れ、窓を開け放ち、部屋の戸を開いて溜っていた空気を入れ換えた。ほこりまみれの家に水を吹きつけ、ブラシでこすり、家を洗った。汚れた窓を拭いた。有難いことに、その年の夏は梅雨の開け切らないうちから、たくさんの台風に見舞われた。台風は近寄りつつある時から僕を多忙にさせた。そして去っていった後は流れ出した土砂の始末の日々が続いた。

夏の別荘地の夜は眠っていた家並が息を吹きかえす時でもあった。暗闇に包まれていた丘陵のあちこちに灯が点々と燈された。生産的な匂いの気ぜわしさと縁の切れたやさしい人が別荘地に現れ、しっとりところを包んでいた空気が踊りだした。赤や黄の parasol が芝生の上に広げられ、人達の呼吸がしぶきのように発散してゆく。走り去る、磨きこまれた車達。全ての樹々の葉は精いっぱい枝葉を拡ろげ、伸びあがろうとしていた。そして、芝生が沈んでしまうくらい土砂降りの雨。夏に拍車をかけるように海から吹いてくる心地よい南風。気が遠くなるくらい高い空に立ち昇る積雲。きらきらと光りながらそり立つ鏡面の波。揺れている彼方の建物。照り返すアスファルトの道。そんな生気達がやってくると、僕の仕事は朝の海のように凧いでいった。会社の台所はやや苦しくなったが、仕方がないことだった。この場所は今、休憩の時間の中にあるのだ。僕は夏の真中を一日働いては二日休むといった調子で過ごしていた。

トリさんは、俺達も季節にならなきゃだめだぜと言って、僕を浜辺に連れ出した。疲れが振り切れてしまうと二人は夏へと飛び出した。久し振りに見る水着姿の女の子達。僕達は、parasolの下でビールを飲んでラジカセでルイスニュースをが鳴らせながらごきげんな夏を楽しんだ。彼は、自分はアイオワ生まれの日系の二世で半分はアメリカンインディアンの血が混ざっているのさ、などと言って、近くの女の子達と気軽に話しこんでは誘い出して泳いだ。僕達は明らかに周囲より老けこんでいたのだけれど、浜辺では結構いかれた奴等になれていた。調子づいて、二人は揃いの黄と赤とマリンプルーの、まるで七十年代のサイケそのままのトランクスをはき、焦げ茶色のストローハットをかぶって、安物の白ぶちのサングラスをかけて、僕のジムニーに乗って幾度も泳ぎに行ったのだった。たちまち、僕達は本物のアメリカンインディアンの様に赤黒く陽焼けしていった。

僕は自分の人生を少しは愉しみたいと思うまでになっていた。僕はこの街へ全てを放棄して来たのではなかった。未だ試合から降りてはいないと、自分では思っていた。僕は自分自身を、あるべき場所へ戻す気の遠くなるような作業の終焉にいたのだ。整理されるべきものは未だ残されていた。それは僕と僕の居るのだろう時刻だった。僕が暮らすべき時間という容れ物は、まったくつかみ所のない霞の様なものになってしまっていた。季節という時計の進み具合に体が慣れてきた程度かも知れなかったが、それでも、僕のために空けられた隙間が、確実にこの街にはあるし、明日が来ることを確信出来るようにもなっていた。会社をはじめた頃、僕には手の甲にびっしりのメモ書きをすることが必要だった。僕はそのために油性の極細のサインペンを何本も買いなおした。そして、終わった仕事をエタノールで丁寧に消して、出来た余白にメモを書き加えた。今や、そのメモ帳は家のホワイトボードにとって代わられていた。忘れないようになれたとは言い切れなかったが、食べた筈のものが冷蔵庫に残っているといったことは、もうなくなっていた。実際、仕事のスケジュールを忘れることは、未だ可成りあったと思う。ただ、僕はそれを余り気にしなくなっていたのだ。そして、ここには、少なくとも僕のいるこの街の端っこには、そういう物忘れが争いの種になるような時間は流れていないのだった。

家のホワイトボードには、そして今月の欄で目につくように書かれたメモは一つだけだった。それはゴミについてだった。花指にいた頃は、落葉やゴミだのを花指の焼却炉で燃やすことが出来た。自分で仕事をはじめてからというもの、それらの処理には随分と苦労させられてきていた。僕は毎日、街から数キロ離れた街の処理場にゴミを運び込んでいた。遅くなって処理場が閉まってしまうと、僕は車の中にそれを置いたままにしなければならなかった。夏が終ると落葉の季節がやってくる。それはきちんとした受け皿を必要としていた。落葉はけしてゴミではない。おおげさにいえば、それは空気中に漂う、世界を造る為の精の化身なのだ。精は樹々に吸い込まれて枝先の小さな結晶となる。そして秋になり、人の吐く息が白くなると結晶達は色を変えて地に落ちてゆく。彼等は長い時間をかけて世界へ戻ってゆくのだ。そして、ある人はそれがもっと速やかに行われるようにと、結晶に火を放つ。僕はある意味では、そんな豊かな「世界」に囲まれているのだった。

はじめ、僕は、どこかの空き地を借りて、焼却炉を置いて自分で燃やすことを考えた。けれども国立公園の中でもあるこの街で、火の始末を余りにせずに焼却炉を置けるような土地はそう安くは見つからなかった。海沿いに潰れた民宿の敷地があったのだが、トリさんに言わせれば、潮風に焼却炉が一年ももたないだろうということで諦めた。結局、僕は少し高くつくことになったのだが、庭つきの別荘を借りてしまうことにした。借りた別荘は、海を望む高台の端にあって、そのままでは人の住めそうにないあばら家だった。広い庭があるとはいうものの、敷地自体が斜面になっていて、二部屋しかない平屋が木で組まれた土台の上に載せられていた。テラスは付いているものの、手摺の木は腐っていて寄りかかることも出来ない有様だった。建物は、濃い緑色が錆でまだらになったトタン屋根を葺かれただけの粗末な造りで、とても別荘とは呼べない代物だった。借り賃は、別荘が街に収めな

ければならない共同管理費に税金を上載せただけだといわれたが、それでも今までの家賃の倍だった。有難いことに、庭にはゴミを燃やすために煉瓦で造られたついたてがあり、それが焼却炉の代りになった。申し訳程度に付けられている二畳ほどのテラスに立つと、目の前の森は一キロくらい先迄緩やかに下っていて、その向こう側には海が静かに横たわっていた。

僕は慣れた干物の匂いに別れを告げ、ジャンゲにも近かったアパートを引きはらって移り住んだ。改めて家の中に立つと、そのあばら家は腰を下ろすところすらないような状態だった。雨戸は湿気で膨らんでいて、はじめは少しも動かず、一端無理にこじ開けてしまうと二度と閉まらなくなった。水道からは毎朝赤い水が出た。畳が取り外されていた寝室の床のあちこちは雨漏りのために腐っていて歩けるような状態ではなく、張り替える必要があった。もっともそれだけの金がなかったので、僕は未だ状態の良い台所兼居間の床を補強して、そこに寝ることにした。屋根の雨漏りはビニールシートをかぶせるとぴたりと止まった。僕は仕事の合間を縫って家の補修を少しづつ続けた。それでも、使えない床材で玄関に看板を造って立ててみると、なんだか本物の会社のような感じがした。

そして忙しい季節が始まっていった。空気の冷えるのは早かったが、その年の秋は夏の匂いを残したまま、なかなか深くならなかった。それでも、本当の秋はきちんとやってきて、森は自身が光りを放つかのように紅色に包まれた。僕は稼がねばならなかった。不動産屋だけでなく、人が住んでいる別荘の戸を片端から叩いた。どんな些細な仕事でも構わないと宣伝に立ち回った。定住している人達は、家の手入れが彼等自身の仕事でもあるようなところがあったから、頼むようなことはありませんねえと言われるのが積の山だったが、全くの空振りでもなかった。良くある仕事は粗大ゴミを引き取ることだった。机一つ、ベッド一つを千円位の手間賃で引き取ってきては、壊して燃やすのだ。頑丈な板は部屋の床板にしたり修繕に使った。壊れたテレビやラジオは分解して、硝子や金属、プラスチックに分けて、街の処理場に持ち込んだ。そうやって、家に入り込んで、芝生が伸びていますね等と言って芝苳をさせて貰い、柵を修繕した。そして夜は落葉を燃やした。秋も終りごろになると、城硝や他の不動産屋から入った大掃除の仕事に追われ、気がつけば年の瀬だった。遅い秋に続いたのは暖かい冬だった。トリさんは市場の閉まった晩に旅に出て行ったから僕は一人きりのしんとした正月を過ごした。おおみそかの晩に、その年の最後の落葉を燃やしてしまうと、僕はテラスに出て海を眺めて年を越そうとしていた。暖かいのは残り火のせいだけではなかった。南風が海から吹きつけていて、春がやって来たような感じさえした。彼方には海岸沿いに街の灯のちらつきが伸びていた。年明けを新しい区切りにする気分なんてなかったけれど、それを見ていると、僕の暮らしはとてもしっかりしたものになっているのを感じた。来る年の足音を僕は、はっきりと聞きとっていたのだ。僕はトリさんや親方にそしてこの街に感謝していた。やや欠けた月が、辺りを明るく照らしていた。どこからか、パンパンという爆竹の音がした。何もかもが順調に流れていた。

ふと、僕はもう還れない自分の子供達がいる食卓を思い出していた。それは思い出してはいけないことだった。けれども、掻き消しても掻き消しても、それは頭の奥の方に浮かびあがってくるのだった。彼と彼女はもう十才と八才になっている筈だった。三年前に彼等は僕のいる家から出ていった。それは凧の後にやってくる突風のような別れだった。頭の中に浮かんでくるのは、彼等と過ごした最後の食卓の風景だった。彼等は行儀良く並んで座ってポップコーンを頬張っていた。時計は夜の七時を過ぎていた。食事はもう済ませていたけれど、彼等は食卓を離れずにいた。上の子は、「とうさんは来るの？」と僕に尋ねた。僕は下の子にねだられて牛乳を飲ませた。勢い良く牛乳を飲んだので、彼女は洋服に牛乳をこぼしてしまった。妻は八時過ぎに帰ってきて、汚れた服を見ると僕を強く罵った。僕は黙って彼等が出てゆくのを見送った。上の子がバイバイとこっちに向かって言ったのが最後だった。

僕は海を見ながら泣いていた。それは悲しいからではなかった。深い深い涙だった。僕はもう二度と彼等に逢うことはないのだろうと思えた。それは、僕の意志や彼等の意志とは別の、闇の海に隔てられたこちら側とあちら側の当然だった。世界はもう離れてしまった後なのだ。僕はホースを取り出して、家に向かって水を飛ばし続けた。なぜだか分からないけど僕はそうせずにはいられなかった。水は暖かい風とは違って冬の冷たさそのままだった。僕は震えながら家を洗い続けた。体を温めるのに安物のウイスキーを少しづつ飲んだ。正月を僕は顧客リストを作って過ごした。丁寧に地図を描いて、僕が何かしらの仕事を頼まれた家を塗りつぶした。そして手書きで新年の挨拶を書き、配って歩いた。港まで降りてジャンゲに行ってみた。店は未だ閉まっていた。僕は戻ってきたら電話をくれるようにメモを戸に挟んだ。トリさんは年が明けると、強い季節風が吹くんだと、繰り返し言っていた。なんだか、トリさんは二度と戻ってこないんじゃないかという気がした。

その年の冬は南の別荘地に二度も雪が降った。トリさんは、ここでは暖かい冬に雪がよく降るのだと言った。その通りに降った雪は翌日には太陽に照らされてあらかた消えてしまっていた。雪解けは春を呼んだ。

春の連休の最後の日に、僕はジャンゲに来ていた。翌日からは連休の後始末に追われる予定がびっしりと詰まっていた。僕は、そんな忙しさを前にして、ぶらぶらと何もせずに過ごしていた。店には数人の客がいたが、トリさんは散髪と言いながら、店の中の草の手入れをしていた。「これ、苧ったやつさ、持ってってくれよ。そのかわり夕飯し作るからさ。」と、トリさんが言うので、僕は適当にレコードをかけ換えながら、水の代りに出される煮込まれた薄いインスタントコーヒーを何杯も飲んでた。

そんなジャンゲの午後に彼女は突然現れたのだ。店に入ってきた男と女の二人連れは、店の中の空気をまるで乱すことなく、奥のボックス席に収まった。男はこちらに背を向けて座り、女の方はその向かいに座っていた。僕は次にかけるレコードを何にするかで迷っていた。トリさんはいらっしゃいとは言ったものの、脚立に登って高いところの鉢に手を伸ばしていたのですぐには降りてこれないようだった。J. ウINSTONのバラッドを僕はかけていた。男の方が振り向いて、結構大きな声で「おねがいます」と言ったので、僕はトリさんの代りに返事をした。僕が気付いたのはその時だった。男は彼女の旦那だった。彼の向こう側には、見覚えのある女性の顔が在った。

僕は六年前のことを思い出しつつあった。ややくたびれたような感じがしたけれど、その顔ははっきりと記憶の中から呼び出されていた。彼女は僕のことを見据えたままぴくりとも動かなかった。僕はまるで蛇に睨まれたような気分になった。彼女はジーンズに赤いローファを履き、濃いグリーンのポロシャツを着て首には金色のスカーフを巻いていた。六年前には胸まで伸びていた髪は肩にかからないように短く切り揃えられていた。僕は今年三十六になるから、彼女は三十三になっている筈だった。記憶が僕の意識とは関係なく、じゅうじゅうと音をたてて湧き出ていた。

僕は彼女を、彼女は僕を見つめていた。

彼女の旦那が、疲れたねと言うのが遠い声で聞こえた。トリさんが「レコード終わったよ。」と言った。トリさんが彼等に水をもっていっている間、僕の記憶は僕の頭の中でガタガタと音をたてて、収まりどこを探しているかのようだった。それは、受け容れてはいけない、無視すべき記憶なのかもしれなかった。けれども、その一方で湧き出た水を止める方法なんか見つからないのだ。とりあえず、僕は彼女に向かってぺこりと頭を下げた。僕はあなたのこと気がついたのですと。そして、僕は椅子を立ててマイケル・Jのスリラーをかけた。

注文をとりに行ったトリさんが、彼女が僕の方を見ているのに気がついて、僕の方をちらりと見た。店の中にはスリラーがお経のようにかかっていた。いつものとおり「はいOK」と言ってトリさんはカウンターの中へ戻った。その間、彼女は二、三度頷いただけで一言も喋らないでいた。すぐに旦那の方も僕のことを思い出したようだった。何度か話したことがあるのだけれど、彼はすばらしく記憶力がよかった。初対面の人と午前中に話していたどんな話題も午後になって反芻することが出来た。僕は彼の視線に片手を上げて応えた。そしてだ。どのくらい時間が経ったのか分からないけれど、彼女は涙を流しはじめたのだ。僕の目は相変わらず彼女に捕まったままだった。トリさんが「知合い？」と、尋いてくれたので、僕はやっこのことで彼女から目を離すことが出来た。「ああ。昔の。」と僕は答えた。旦那が「どうしたの。」と言っているのが聞こえた。そして、彼女はそれには応えずに席を立ち僕の方にやってきたのだ。少し瘦せたような気がした。僕は、どう振舞えばいいのか分からなかった。開け放してある裏口から差し込む光りが眩しくて、彼女の姿を黒く浮き上がらせた。

「久し振り・・・だね。」

「うん。」と、彼女は応えた。

「旅行中？」と、僕が聞いても返事はなかった。

「・・・まあ、とりこんでるみたいだから、僕のことには構わなくていいんだ。」と、僕は彼女の目を見なくて済むように、自分の視線を彼女の顔から少しそらして言った。僕は逃げていた。彼女は未だ涙を流し続けていた。涙は頬をつたってぽたぽたと床へ落ちていた。トリさんが、これ使ってよと、カウンターにお絞りを置いた。彼女は軽く頷くと、それを手にした。そして、ごくりと何かを呑みこむようにもう一度頷くと、絞り出すように言ったのだ。

「ずっと会いたかった。」と。

まるで、涙の暖かさが伝わってくるような声だった。

僕は彼女の目を見つめていた。他にどうしようもなかった。

通り一編の言い方をするならば、六年前、僕は彼女を愛していた。

旦那は席に座ったまま事の成行きを見ているだけだった。彼女は僕の側に立ち尽くしたままだった。

「ビール飲むかい？」と僕が言うと、彼女は頷いた。

トリさんが「僕のおごり。」と言って、ビールを二本カウンターに置いてくれた。トリさんは「あちらにもさ。」と旦那の方を指さした。僕は、立ち上がって彼女の旦那のところへグラスとビールを持って行って挨拶をした。

「久しぶりですね。お元気ですか。・・・その、何だかとりこんでみたいですけど、僕のことには気にしないでやって下さい。僕はもうすぐ出ますから。」と、僕は言った。彼は、とりこんでみたいという僕の言葉に、「いや・・・」と一度言いかけて、続けた。

「それが、よく解らないのです。突然泣き出して・・・」少し、彼の顔には疲れた様子が見えたような気がした。

彼女は、未だカウンターのところに立って涙を拭いていた。なんだか、いつもより店の中が蒸し暑く騒がしいような気がした。でも、それは遠い遠い音のせいだった。

僕は彼女のところに戻ると、仕事があって、もうそろそろ出かけなければいけないんだと言った。別段仕事なんかなかった。収まりかけていた涙がもう一度あふれだした。

「まあ、座ったら。」と、トリさんが言った。

「ほんとに会いたかったんだから。」と、ぐしゃぐしゃな涙声が出た。

僕はどうにも出ていけない雰囲気になっていた。

三年前の僕を救うことが出来た人がいるとしたら、それは彼女に違いなかった。三年前、僕は僕の家族を失った。三年前彼女には旦那がいた。

「遊びに来てるの？」と、僕は尋ねた。彼女は頷いた。

「この街で仕事してるんだ。掃除屋みたいな仕事なんだけど。」

一瞬が長い尾をひいて過ぎていった。

そして、彼女は僕を目を見つめて繰り返して言った。

「ねえ、わたし、ほんとうに会いたかったんだよ。」

「・・・元気にやってるの？」と、僕はとりあえず、聞いた。

彼女の顔に僕を責めるような表情が一瞬だけ現れたような気がした。けれども、彼女は大きくため息をつくと、少しだけ安心したような顔つきになって答えた。

「元気でやってるわ。これから帰るところ。電車、待つ間にね、港が見たくなって下りてきたのよ。それで、ここ歩いてたら、なんだか見憶えのあるような店があったから・・・このことよ・・・で、入ったの。」

「ここに来たことあるの？」と、僕は聞き返した。もちろん答えはNOだった。彼女はビールを少しづつ飲みながら、そして少しづつ話した。

「ごめんなさいね。急にこんな風になっちゃって。まさか、こんなところで会えるとは思わなかったのよ。でも、ほんとうに会いたかった。会えてよかったんだよ。」と断定的に言う時にそうしてたように語尾を強めて頷きながら言った。

僕は、事情が全く呑みこめないでいた。

「あの、それ、どういう事なのか、良く解らないんだ。・・・だから、つまり僕のこと探してたって事なのかな。」と、僕は尋ねた。

彼女は大分落ち着いてきたようだった。涙を拭き切ると、昔の彼女の顔になったような気がした。

「いろいろ、話せば長いんだよ。・・・探してた。うん、探したよ。でもね、あなたに何かして欲しいとかいうんじゃないのよ。・・・さっきは、ほんとうにごめんなさい。」

そして、彼女は僕の方に向きなおって、大きく息を吐きだして、

「でも。・・・会いたかったんだよ。」と言って微笑んだ。

僕と彼女を取り巻いていた緊張した気分がずっと消えていくような気がした。僕はほっとした。

「ヒナタさん、元気にしてたんだね。こんなところで。」

「ああ、もう、ここへ来てだいぶ経つんだ。・・・かみさんとは別れて、子供とも離れて一人でね、やってるんだ。まあ、そんな事、どうでもいいんだけど。」と、僕は言った。少しの間、僕

達は何も言えなかった。

奥の方から、そろそろ電車の時間だという声が聞こえた。彼女はそれに手で応えながら続けた。

「わたしね、今年になってから、ずっとヒナタさんのこと探してたんだよ。探そうと思ってじゃなくてね。説明するの、少し難しいな。そうしなくちゃ居られなかったんだよ。・・・そう、ひとつだけ、ヒナタさんに連絡取する方法教えといてくれないかなあ。」彼女は椅子から立ち上がろうとして半身になりながら言った。

何もかもは彼女の側にしかなかった。それがどういうことなのかは測り知ることも出来なかった。僕は自分の家の電話番号をメモ用紙に書いて渡した。

「でも、どうしてなんだい。いや、迷惑だっていう意味じゃないよ。僕も久し振りで、あなたの顔が見れてとても懐かしいんだよ。正直言って嬉しいんだ。でもさ、どうしたっていうのかな。もちろん僕で力になれることがあれば、構わず言ってくれていいんだ。出来ることなら力になれると思うよ。」と、僕は言ってみた。彼女は、ふうと、ため息をつくと応えた。

「今日はね、わたし、もう帰るよ。五時の電車に乗らなくちゃいけないしね。今、いろんな事話そうとしても、うまく言えないと思うわ。でも、また来る。ここへ来れば、ヒナタさんに会えるからね。」そう言うと、彼女は正面を向いて少し考え込んでから続けた。

「わたしはね、ヒナタさんの居場所が分かればいいの。」

「僕にはとても難しいことらしいね。どうやら。はじめは、責められてるみたいだったけどね。ねえ、トリさん。」

「ああ、仇きが見つかったような形相、だったな。あぶないと思ったよ、俺。」

彼女は、トリさんの造り顔を見て笑った。

「でも、もう電車の時間が近いのよ。」と、彼女は奥の方を見た。そして、彼女は旦那を押し出すようにして店を出ようとした。

彼は、実際に僕に軽く会釈をして不思議そうな顔をしていたけれど、あと数十分はあるから走らなくて済みそうだというようなことを彼女と喋りながら、するりと店を出ていってしまった。

結局、僕のはじめから終りまで満足に釈かれることなく、椅子の上に取り残されていた。僕は唐突に始まった出来事を頭の中で整理しようと努めていたが、そんな事は全くの無駄だった。整理しようにも僕のもっているカードは無いのだ。確かに、僕は何かしらの要素の一つに違いなかった。でも、その何かしらは僕の知らないところで勝手に流れているのだ。僕は暫くの間ぼおっとしていた。生姜のスープをつくって貰い、それを飲みながらチーズを食べた。記憶は思い出されることを拒み、頭の中に浮かびかけては沈んでいった。

三年前、僕は彼女を必要としていた。三年前、僕は彼女には会うことなく、この街に来た。

沼は未だ見えてこなかった。平坦だった道はこの先の方で急に下って見えなくなっていた突然、後ろの方から

「おい、おい・・・お前を呼んでるんだぞ。」という声がした。

振り返ると、その声の主が僕に追いつこうと歩いていた。その声の主を見て、僕は驚いた。逃げようという気持ちが湧きあがったが、僕は睨み付けられて逃げられない猿だった。動けなかった。そこにいるのは人の形をした獣だった。ニッカズボンと長靴下、きちんとした登山靴を履いていたから、露出しているのは鼻先の尖った顔と薄茶色くて長い毛に覆われた手だけだった。手の爪は先が鋭くとがり、綺麗な桃色をして艶やかに光っていた。顔の色もそんな桃色に近い肌色で、耳は空に向かってぴんと立っていた。そして、口元には正真正銘の牙が左右に二本ずつ生えていたのだ。瞳だけは、その風貌に似合わず優しく微笑んでいるように見えたのが救いだった。つまり、僕の目の前には狼男、いや、シャツの下にはふっくらとした胸の輪郭があった、つまり狼女がいたのだ。

「お前、どこへ行くんだ？」それは、トーンの高い女の声だった。

「おび沼までだけど。」

「何しにだ？」

「僕はハイキングに来てるんだ。」

「何で、ここに来ようと思ったのか尋いてるんだよ。おい。」

そう言いながら、狼女は僕の行く手の方に回り込んだ。

「それは・・・」と、僕は少し詰まってから続けた。「その、何か、ここへは来てはいけないのかい。」

「いけないなんて言ってないだろうが。」

「だから、ハイキングに来たんだ。」

「けっ。」狼女はそう言うと、僕のまわりをぐるりと回って、僕にもっと近付いてきた。僕は、後ずさりして言った。

「その、知合いに綺麗なところだから行って見たらどうかって言われたんだよ。それ以上、他にどう言いようもないよ。」

「最初から、そう言えば良いんだよ。俺は、ここの番人だ。何か採って帰ろうと思っちゃいないか、えっ、お前。ここらに生えてる草木とか。おい。」

「いや、何かを採りに来たわけじゃ・・・」と、そこまで言って、僕は蛍石のことを思い出した。

「俺は、ここの番人だからな。ここには綺麗な草や木が沢山ある。お前には解かんないだろうが、ここの草木はとても微妙なバランスを取り合って支えあうように生きてるんだ。例え一本採るだけでも、そいつが壊れちまうことがあるんだ。」

言葉遣いの割りには道徳的なことを言う奴だと僕は思った。

「いや、草木じゃなくて、ある人に頼まれてついでに蛍石を拾ってきてくれと言われてるんだけど。・・・」と、僕は正直に言った。なにしろ、現実には起きていることとは思えない光景だったが、とても怖かったのだ。

「ほおう、蛍石。蛍石の事をだ、お前知ってるのか。こいつは驚いたよ。蛍石がここに在ることを知ってる奴がいるとはね。」

僕は慌てて続けた。

「でも、生態系のバランスを壊すつもりなんか全然ないんだ。蛍石だって、駄目だって言うなら要らないよ。」

「なにっ！要らないだと。それは、」

急に狼女の顔が赤みを帯びた。

「どういうつもりだ。それは。別に要らないのに、持って行こうとしたのか。これは許し難いぞ。」と、狼女は言うのと、僕を睨みつけた。

「いいか、蛍石を採るには、それ相応の覚悟が要るんだぞ。そこらに転がってるわけじゃないんだぞ。おい。」

「だから、無理には要らないって言ってるじゃないか。」

少し狼女の目が赤っぽく光りだした。僕はかなり悪い状況なんじゃないかと思って、慌てて言い直した。

「いや、要らないっていうんじゃないで、どこにでも落ちてると思ってたんだ。そんなに大切なものなら、要らないって言ったんだよ。もちろん、持って帰りたいと思っているよ。」

「ますます腹が立ってきたね。」と、狼女は言うのと、呆れたという風に、ぷいと僕に背を向けて、沼の方へと歩きだした。

僕は助かったと思った。狼女が見えなくなったら、もとの道に戻るつもりになっていた。大体、あんな奇妙な生き物が居るってことがおかしいのだ。これは何かの間違いなのだ。

すると、狼女は急にこちらを向いて叫んだ。

「おい、早く来いよ。逃げるなよ。お前の足で俺から逃げようなんて、間違った考えだからな。」

「いや、少し休もうと思ったんだ。」

「嘘をつけ！」と、僕は一喝された。僕は無意識のうちにきおつけの姿勢を取っていた。

「お前。今、何かの間違いだとか思ってただろう。世話を焼かせるなよ。もう少しでおび沼へ出るんだ。ついて来いよ。」

僕は諦めることにして狼女に続いた。狼女は何も喋ろうとしなかった。不思議なことに、道は地図に描いてあるとおりの一本道ではなかった。少なくとも十の分岐が次々と現れた。

狼女は、分岐点をおれる度に、こっちだ、あっちだと声をかけた。かなりの速さで歩かされたこともあって、僕はどこをどう歩いたのか分からなくなってしまっていた。ひょっとすると、僕は沼ではないところに連れて行かれるのかも知れなかった。不安が爆発しそうだった。僕は、我慢し切れなくなって、待ってくれと声をかけようと思った。

その時、目の前の森が切れてきらきらと光る沼面が見えてきたのだ。反射光が森の中に強く差し込んでくるのがはっきりと分かる程、沼は自らが光りを放っているように見えた。光りは水面が普通に光る時のような白色光でなく、ほのかに青白い色をしていた。沼の水は透きとおったブルーで、その奥にはっきりと見ることのできる沼底は、細かなコバルト色の砂粒におおわれていた。

この世の沼とは思えない美しさだった。

僕は一度だけ、これに近い色の湖を見たことがあった。あれは北海道の阿寒湖の近くにある小さな湖だった。そこは火山性の土壌のために水が強い酸性で、その湖水は魚や苔に生きることを許さなかった。水は濁ることを知らず、本当の水の色をしているだけなのだ、そんな説明を湖のほとりで聞いた。ここも、同じような酸性の強い沼なのかも知れなかった。

けれども、この沼は、とても照らされて光っているだけとは思えなかった。それは、集められてから、何かの意志をもって放射されているようにさえ思えた。そして、沼だけでなく、周りにあるもの全てが自ら輝いているように見えたのだ。沼沿いに生い茂っている草木はどれもが浮き上がるような若い緑色に輝いていた。そこにあるどれもが新品の植物に見えた。僕は、立ち止まって幾度も息を呑みこんだ。

辺りを見回すと、顔色には出せなかったが、もう一つ気が付いたことがあった。辺りの植物のことだった。それは、どれも輝きこそ違うものの、見憶えのあるものばかりだったのだ。僕は、それらをほとんど、ジャングで見ることがあった。おそらくジャングの植物のどれもが、ここから丁寧に持ち運ばれたのだろうと想像できた。トリさんは、この狼女の監視の目を盗んで草木を持ち帰ってしまったのだろうか。ともかく、そのことは黙っていた方が良さそうに思えた。

「きれいだろ。」そう言われて、少しだけ緊張が消えていったような気がした。

「おまえ、引き返すところだったんだぞ。」僕は頷いて応えていた。

狼女は、つまり彼女は、多少ワイルドであるけれど、全てを説明して相手を納得させるようなタイプではないのかも知れなかった。第一、彼女の姿を見たら、いくら納得出来るような説明をしてもらっても、ついてくるような奴はいないだろう。彼女にとっては、詰まるどころああいう接触の仕方しかないんじゃないかと思えたのだ。

「礼を言わなくちゃいけないかも知れないね。」と、僕は言った。

狼女はそれには何とも応えなかった。何かに引っ張られるように僕達は再び歩きはじめた。じきに僕達は森を抜け、沼のほとりの少し開けた浜辺に出た。浜は細かな透きとおった緑色の艶やかな砂粒からできていた。

狼女は足を止めて僕の方を向いて言った。

「お前、ここで待ってろ。俺は小屋へ行って来るからな。逃げるなよ。未だ、お前は俺に信用されていない。草一本採っても俺には分かるからな。」

「待ってろって、ここがおび沼じゃあないのかい。」

「いちいちうるさい奴だな。俺はお前をここまで連れて来てやった。お前はおび沼を見たかったんじゃないのか。」

「いや、だから、さっきも言ったと思うけど、感謝してるよ。」

「だったら、そこに座ってろ。とにかく、お前一人放って、勝手に歩かせる訳にいかない。」そう狼女は言い小屋へ向かおうとした。

僕は彼女の風貌に慣れてきたせいもあるけれど、少し腹が立ってきた。今言わなければこの先どうなるかわからないとも思った。そんな迫られたような気分も手伝って僕は狼女の背中に向かって反撃に出た。

「一体なんだっていうんだよ。まるっきり訳もわからず引き回されて。僕は、ただ、ハイキングにきただけなんだ。放っといてくれよ。大体、僕はここを汚したり、物を採ったりするつもりはないんだ。それでいいじゃないか。それに、僕は体を鍛えるつもりでここにきたんじゃない。一人でぶらぶら歩いて夕方になれば列車に乗って帰るつもりなんだ。何で僕があんたの指図通りにハイキングしなきゃいけないんだ。一体、他にどんな理由があってこんな風に付き纏われなくちゃいけないんだよ?。」僕は、一気にそう言うと、その場に座りこんだ。見る間に狼女の顔が真っ赤になっていった。狼女は黙って僕の顔を食い入るように見つめた。僕は自分のザックの中から缶ビールを取り出して一気に飲み干した。少し温くなっていたが、僕はもうどうにでもなれという気分になっていた。すると狼女は僕の方に近寄ってきた。

「缶ならきちんと持って帰るよ。」と、僕が言うと、狼女は「おい。」と言って僕を見据えてから続けた。

「悪かったよ。」

「えっ。」

「ごめんよ。」

僕は自分が負けてはいなかったのだと分かった。けれども、僕は同時に勢い余って自分にもパンチを喰くらわしてしまったのだ。本当に謝らなければいけないのはまるで僕の方のように思えた。僕はやり場なく応えた。

「いや、分かってくればいいんだよ。少し言い過ぎたよ。・・・このところ、怒るなんてことなかったから、言い過ぎちゃったみたいだ。」

「それじゃ、あとは一人で行くんだな。」と、狼女は言った。僕は返答に困って「ああ」とだけ応えた。狼女は謝ったとはいえ、強い口調は変えないで続けた。

「それじゃ、気をつけるんだぞ。今日は満月の晩だ。森もやけに騒がしいからな。お前じゃなけりゃ、誰かほかの奴が来てるのかも知れない。・・・ここは奇麗なところだけどな、それ

だけじゃないからな。月が昇ってくる前には帰った方がいいだろう。」
彼女はそう言うと、ほっとため息をついて去って行った。僕は、ぼんやりと沼を眺めていた。
狼女の足音が背中の方で遠ざかっていった。風がさらっと吹いて僕の顔を撫でていった。僕は風につられるように後ろを振り返った。彼女がとぼとぼと歩いてゆく後ろ姿が見えた。

僕が、「ねえ」と小さく声をかけるのと、彼女がこちらを向くのが同時だった。僕が彼女に何かを言わなくちゃと思っているうちに、彼女が先に話しだした。

「理由は分からない。分かってるかも知れないけど、うまく説明できない。でも、とにかく、いつもと違う。」

「僕にしてみれば、さっきから分からないことだらけだよ。・・・でもね、僕は、考えてみれば、もう帰り方も分からないんだ。つまり、助けが必要だってことだよ。・・・つまりさ、僕は君と一緒に行動することにしたよ。勝手だと思われても仕方ないけど。」そう僕が言うと、彼女はもう一度僕の目を見つめた。

「これからどうするか分からないんだけど、ここで待ってるよ。ともかく、ここに居るよ。」と、僕は言った。

「ああ、待っててくれるんだな。・・・今、お茶を持ってこようと思ってたんだよ。・・・それとも、小屋まで来るか？」彼女はそう言った。

要するに、言葉遣いや態度とはバランスが取れていないと言えればいいのだろうか。彼女は親切で善意なのだ。僕は、「ああ。そうする。」と、答えた。

森へ入り込んで程無く、樹々の生えていない小さな広場に出た。そこには木造の小さくて粗末な家が建っていた。小屋の前には椅子が二脚置いてあった。

「ここで待ってるよ。」と、狼女は椅子を指して言った。

僕は頷いてそこへ座ると、空を見上げた。ぽっかりと森に開けられた丸い空が見えて、そこには青い風が吹いていた。その小さな背もたれの付いた椅子に座って待っていると、そのうちに、奇妙な匂いが鼻をついた。蜜の匂いのような気がした。

狼女が持ってきたお茶はたんぽぽの根を煎じたものだった。ほんのりと甘味が付けられていて、飲み込んでしまうと苦みが口の中に残った。お茶を飲みながら、僕と狼女は穏やかに何かの話しをした。何を話していたのかが不思議と良くは思い出せない。ともかく、僕は分からないことが沢山あるのだけれど、それについて知りたくもない、知らないままで構わない、僕は放棄してるんだというようなことを喋った気がする。狼女は一体何者なのか、なぜこの番人なのか、いつからここに居るのか、そんなことを知ろうとは思わないのですと。そして、狼女がそれにどう応えたかも忘れてしまった。お茶を飲んだ後に、僕の体は熱くなったかと思うと急に冷たくなったりを繰り返した。なんだか、そのことだけが強く記憶の中に残っている。お茶に何かが入っていたのかも知れなかった。それとも、僕はいつもの通り忘れてしまったのかも知れなかった。僕達が再び沼の畔に戻った時には僕の記憶は元通りになっていたようだった。むしろ鮮明になったといっても良いくらいだった。(もっとも、昼食を食べるのを忘れていることに後から気がついたが。)

僕はザックを背負いなおすと、

「これからどうするんだい。」と、尋ねた。

「蛍石を採りにいくんだろ。そう言ってただろう。」と、彼女は答えた。僕は頷くと、黙って狼女の後に続いて歩きはじめた。疲れはとれていた。とてもすっきりとした気分になってい

た。それは何かを始められるような、ともいえる気分だった。僕は何かを話したくなった。何でもいいから話せば、話しているうちに物事が分かったり整理することが出来ることがあるけど、ちょうどそんな感じだった。

はじめ、僕は狼女を相手に、ここの夜は冷えそうだとか、ここの空気は何かで洗われているみたいだとかいう印象を話しかけてみた。狼女はそれについては、ああとか頷くだけで、話しを続けようとはしなかった。

僕は突然に、

「ねえ、君とは全く関係のないことなんだけど・・・少し話して良いかな。」と、言ってみた
狼女は少し間を置いて、

「ああ、いいよ。あんたの話すことなら関係なくはないよ。」と、答えてくれた。

「どこから話せば良いのか分からないんだ。」

「構わないよ。」と、狼女は言った。

「ありがとう。」僕は話しはじめた。

「ここに来ることになったいきさつとっていいか分からないんだけど、発端はヒロコっていう女の子、女の子っていても三十過ぎの女性なんだけどね。発端はヒロコなんだ。」

「僕がヒロコに出会ったのは、もう六年前のことになる。僕はある会社の広報紙を出す部署に春から勤め始めていたんだ。部署は違うんだけど、そこに彼女も居てね。僕が勤め始めてから三カ月もしないうちに彼女は結婚したんだけど、それまでは殆ど話しやすい話もした事もなかったんだ。でも、何のきっかけか思い出せないんだけど、僕も彼女もコンピューターを使ったグラフィックデザインに興味があってね、コーヒー飲みながらそんな話しをするようになったんだ。もっとも、世間話しをしてる方が多かった。まあ、それでも、お互いに参考になる情報を交換したりしてた。彼女、とても綺麗な人でね。こんな言い方しかできないけれど、とても理解し易い人だった。折り目正しいっていうんじゃないけど、僕から見れば彼女はきちんと積み重ねられた積木のような存在だった。危なっかしいところや、出っ張ったところが全然ないんだ。それでいて組み上がったものは、独特の形をしている。・・・」僕は全く一方的に話し続けていた。

「疲れちゃったかな、こんな話し。」と、僕は狼女の応えを待った。

「いや、いいよ。続けて。・・・疲れるんじゃないかって思うのは、その話しがあんたにとって疲れる話しだからだよ。でも、俺は平気だよ。」

「ああ、確かに思い出しにくい話しなんだ。とてもね。でも、今は話せそうな気がするんだ。」

「ああ。」

「それで、そのうちにね、不思議なことに気がついた。それは自分の持っている世界のことなんだ。現実として自分が持っている時刻を離れてね、勝手に想像の世界に入り込むことってあると思うんだけど。夢の続きに入るようにね。彼女は僕に、よく夢の話しをしてくれた。彼女が見た夢の話しだよ。そして、僕達はその夢の続きがどうなるかなんて事を想像してみたりしてた。・・・で、そのうち、そうやって夢で見たり、話したりして出来上がるストーリーに、妙にしっかりした継ながりが出てくるようになってしまったんだ。ストーリーのある部分は僕や彼女の夢ではじまり、茶飲み話にその続きがでてきて、そして僕達は、そのまた続きを夢の中で見るようになった。そうやって見た夢の話しをすると、何だか同じようなシチュエーションが現れてくるようになっていたんだ。」

「同じような夢を見るようになったってことか？」と、狼女が応えた。

「いや、丸きり同じだって訳じゃない。例えばね、どこかのレストランに入ったら、客の中に猿だの犬だのが居たって夢を見た。でも、お腹がとても空いているから、とにかく席について注文するんだ。ところが、メニューにはドッグフードのミラノ風とか、干し草のてんぷらだとかがあって、何とも気持ち悪くなる。そんな話しが夢の続きで二人の口からポンポン飛び出してくるんだ。そういうの考えるのが二人とも好きだった。それで、その続きを二人とも夢で見る。あのレストランもう一度行ったとか、その時は店の中ががらりと変わってたとかね。おまけに停電で電灯が点いていなくて蝋燭の火で食べたとか。そんな夢を彼女が見たって話すんだ。そうすると、僕もそんなような夢を見ていて、『あれ、蝋燭だったのは停電してたからなのか』なんて僕が応える。すると彼女が『だって、あなたは遅れて来たじゃない。私、あなたが来る前にウェイターの人に聞いたのよ』っていう具合に続いちゃうんだ。周りの人が聞いてて気味悪がったりするんで僕は気がついたんだけど。交互に夢の話しをしてもつじつまが合っちゃうもんだから・・・。そこが作り話じゃなくて世界なんじゃないかって気がついたのは随分後になってからなんだけどね。」僕は喋り続けた。

「世界には具体的な時間ってものが丸でなかった。その代りに時間の前後だけは妙にしっかりしてた。そんな世界が、はじめは途切れ途切れに、やがてはしっかりと出来上がっていったんだ。」

そう、僕達ははっきりとその世界に帰属していたのだ。

「それに気がついた辺りで止めとけば良かったのかも知れない。でも、僕達は、気がついた時は、自分でストーリーを考える必要すらなくなってしまったんだ。まるで記憶を共有してるみたいで。それは日常が造られる必要がないのと同じ位、確かになっていったんだ。」

「彼女のことが好きだった？」狼女が付け加えるように言った。

「ああ。今では、はっきりとそう言えるよ。でも、その時は単純にそう思っただけじゃなかった。何だか、宝物でも持ってるような、そんな気分だった。それに、僕は結婚していて子供だって居たし、彼女は彼女の旦那をきちんと愛していた。少なくとも僕たちの共通点として現実の世界で起こるべきことは何もなかったんだ。」

「それで、実際に何も起こらなかったのか。」

「ああ、何も起こらなかった。だから、その世界も、決して消えなかった。」

「彼女は、そのことをどう思ってたんだ？」と、狼女はその時だけ、不思議と何かを探すように僕に尋ね返してきた。

「いや、世界っていう言い方を僕が彼女にした事は、なかったと思う。僕も彼女も、不思議だとかおかしいとか、そんな気持ちはまるで湧いてなかったと思う。確かめたわけじゃないけど、それは確信出来るよ。僕だっておかしいなんて思ってなかった。当たり前なことだったんだ。でも、誰かが僕達の話しを聞いてて、何それ？なんてびっくりしてる時に、僕達はお互いの顔を見て、にやにやしてたりしたんだけどね。」

僕の頭の中に彼女の笑顔が思い浮かんだ。

そう、彼女に何が起こったのだろうか。それから、何が起こったんだろうか？

「結局、世界は、おそろしく深くなっていった。そして、彼女と出会ってから三年経ったところで、僕は転職することになった。僕は、彼女と離れたくなかった。一秒でも一緒に居たい。そう思った。」

狼女は、深いため息をついていた。

「でも、その時、僕と僕のかみさんの間は上手くいかなくなっていて、それが逆効果になって、何も出来なかった。それに、僕達は共通点として、きちんとしていたんだ。結果として何も起こらなかった。世界のこともそのまま忘れ去られてしまうようだった。幸運にも、僕は忘れるのが得意だった。だって、さっきも言ったけど、僕は彼女のことを愛していたんだ。でも、何もしないし何も起こらなかったせいで・・・世界は僕達の中に閉じ込められたままで、残されてしまったみたいなんだ。忘れるにはあまりに深くなり過ぎていたんだ。」

そして、彼女には何が起こってしまったのだ。放っておかれた世界が、彼女に蘇ってきて、それは僕のところにもやって来てしまったのだ。

僕は話し続けた。止めることは出来なかった。

「その彼女が、今、残された世界に呑み込まれようとしてるんだ。ところが、僕の世界はどこかへ行ってしまっていて、どうしたらいいか分からない。」

「良く分からないな。」狼女が僕の方を振り向いて言った。

「まあ、でも、いいよ。」

「うまく伝えられなくてごめんよ。彼女がね、ついこの間、彼女は僕の目の前に現れたんだよ。全くの偶然にね。」

「それは良かった。」その言葉は、意外に、狼女の気持ちの響きを持っていた。不思議と、狼女が意見をしたと思えるのは、後にも先にもこの時だけだった。

「でも、僕はまだ分かっていない。少なくとも、僕はそう簡単に続を演じる訳にはいかないんだ。・・・そう、僕は時間を遡ることで世界に戻ることは出来ないんだよ。世界には、時刻がないんだ。」

「まるでその世界っていうのはこのようだな。ここには時間はあるけど、時刻なんていうものはないからな。」

「でも、そういう世界ってのは、実際の世界なんかより、もっともっと真実（ホントウ）だっていう気がするんだ。」

そう。詰まる所、僕達は真実の中には生きられない。でも僕は真実を捨て去るわけにはいかないんだ。それに、捨てようとしなくても真実はきちんと誰の中にもあるんだ。月並みだけど。

「そのことと蛍石と、関係があるんじゃないのか？」

「あると言えば・・・あるよ」僕は、昨日の夜の約束を思い出していた。

「そうか。まあ、理由はともかくだ。俺はお前を蛍石のあるところまで連れていくことにす

るよ。ちょっと大変だけどな。そう。どうでもよかないんだよ。それはな。」と、狼女は何度も頷きながら言った。

彼女が突然僕の目の前に現れた後も、僕は幾度もジャンゲに顔を出していた。三度目にジャンゲに立ち寄った時、彼女がやって来ていた。彼女は一人で来ていて、丁度帰るところだった。彼女は、トリさんに向かって、「あっ、来たよ。」と、言うのと、にっこりと微笑んだ。僕は何て言おうか少し困ったんだけど、挨拶をすると、立っている彼女の横に座ってビールを頼んだ。蒸し暑い夕方のことだった。僕は、コップのビールを一気に飲んで咽を潤おすと、こう切り出した。

「あんまり突然じゃないかな。なにもかもがさ。僕には何が何だか分からないんだ。できれば、説明して貰えるといいんだけど。」

「ごめんね。ヒナタさん。でも、あたし、今日はもう帰るわ。・・・それとね、あたし、こっちに来ようと思ってるんだよ。」と、彼女は明るく笑って、唐突にそう言った。

「えっ。？」僕は聞き直した。けれども、それはとてもはっきりと聞こえていたのだ。

「本当みたいだぜ。」と、カウンターの中からトリさんが笑って言った。

彼女は、それだけ言うと、今日はもう電車の時間だといって店を飛び出して行ってしまった。僕は、一端、じゃあ気をつけてなどと言ったものの、どうにも処理しきれない混乱の中に置いてけぼりを喰って座っていたのだが、すぐに思い立って彼女を追いかけた。彼女は走っていた。僕も走りながら、今度はいつ来るつもりなんだと尋ねた。彼女は走り続けたままで「あさって」と、答えた。僕は、こんなのは、おかしいのじゃないかと言った。そして、あさっての昼にジャンゲで会う約束をした。

連休も終って、僕はとても忙しかったけれど、僕の知らないところで何かがぐるぐるとまわり始めているのだ。僕は、もうそれから逃げようとは思わなかったし、それが何なのかを知りたいと思っていた。

僕はジャンゲに戻ってトリさんに聞いた。トリさんは、

「俺にも良く分からないけどね。今日、働き口を決めたみたいだぜ。」と、言った。

「どこで働こうっていうんだらう？」と、僕は応えた。

「それがさ、ここだよ。」

「えっ。」

「まあ、取り敢えずって事だけどね。」

僕はますます混乱した。僕はもう一度尋ねた。

「いつから？」

「あさって」

「ここは人を傭う余裕あるの？」

「まあ・・・ここんところ順調。昼過ぎたら、人に任せて釣りでもしようかと思ってね。」

「さっきね、追いかけてあさっての昼に会う約束したんだよ。」

僕は二本目のビールを注がれるままに飲んでいた。

「もう、住家まで決めてきちゃったって言ってたよ。」と、トリさんは教えてくれた。とりあえず、彼女がここへ来ることをやめないのなら、僕はトリさんに感謝するべきだった。

二日後に僕がジャンゲに入ると、カウンターの中から「いらっしやい」という彼女の声が聞こえた。僕はやれやれと思った。「もう、お客さんも引きはじめたから平気よ。」と、彼女は言った。

「あたし、きちんと説明しなくちゃってずっと思ってたのよ。」

僕は、ほんの少しの間だけど、それには応えないで黙っていた。確かに僕は何かを分かりたかったけれど、聞かない方がいいのかも知れないっていう気も少しだけ残っていたのだ。でも、もう彼女は来てしまっていたのだ。

「ここはね、とても良いところだよ。いい街だよ。住むのには特に。」

「でも、家を探すのに少し苦労したわ。」

「言ってくれば、不動産屋なら何軒も知ってるのに。」

「ありがと」と、彼女は残った洗い物をしながら応えた。

「お腹、空いてるんだ。」と、僕が言った。

「はいOK」と、トリさんが答えた。

僕は彼女に尋いた。

「むこうの仕事とか、その・・・こっちに来ちゃって構わないの？まあ、関係のないことかも知れないけど。」

「言わなかったかな、あたし、仕事、もう辞めちゃってるのよ。辞めさせられちゃったって言ってもいいけど。」

「僕は何も聞いてないよ。それだけじゃなくて、何もかも聞いてない。」と、僕が言うと、

「そうね」と、彼女は明るく笑った。

けれども、彼女の話しは、そんな笑いとは裏腹に重たくずしりと僕を打ち据えることになった。それは彼女にとっても思い出すのがしんどい話しのようだった。僕は彼女に引っ張られ深い海に沈んでいくコンクリートブロックのようだった。

片付けが終ると、かの女はカウンターの中に椅子を置いて、ぽつりぽつりと僕の目を確かめながら話しはじめたのだった。

「あなたとはじめて会ってから何年経つのかな。丸きり会えなくなっちゃってから。・・・ともかく、何もかも変わってしまってもおかしくないくらいの昔だよね。」

語尾を強める彼女のアクセントの置き方は昔のままだった。彼女は続けた。

「普通、忘れちゃうよ。あなたのことなんか。あなたがこの間、わたしを見た時そういう顔したみたいだね・・・ほとんど忘れるものなのよ。もちろん。わたしも、そう。例外じゃないよ。」

僕は頷いた。

「まあね、でも忘れるとか、忘れられないとか、そんなことじゃないの。はじまりは。・・・わたしね、眠り病になっちゃったのよ。とにかく眠くって、本当に幾らでも眠っていられるのよ。眠っている間はずっと夢を見続けたわ。毎日毎日、まるで夢の中で仕事してるみたいにきちんと夢を見て、それが積み重ねられるように続いていくのよ。」

「今でも？」

「ううん。今はさっぱりしちゃった。丸きりの普通。だって夢見る必要ないんだもの。あなたは見つかったのよ、もう。・・・わたしの夢はね、分かるでしょ、あなたを探す夢だったのよ。」

「僕を？」随分拍子抜けした僕の声だった。

「そう。今年の正月からずっと探し続けてたのよ。お蔭で会社もね、辞めたよ。だってね、人探して大変なんだよ。目が覚めるとどっぴりと疲れちゃってて、もう何もやる気がしなくなっちゃうのよ。」

「僕を探してた？」

「そう。目の覚めてる昼間にもね。・・・見つからなかったよ。」

「ああ。僕はしばらく家にも戻らなかったし、結局はそこを引き払っちゃったからね。・・・でも、どうして探してたのかな？・・・こう言ったら悪いけど、僕にはあまり思い当たる節がないんだ。」

「それをね、うまく言えたら、こんなまどろっこしい話し方してないよ。でもね、突き詰めてみると、あなたのことが不明だっていう事に、わたしの中の構造みたいなものが耐えられなかったっていうことかな。・・・つまり、あなたって、わたしの中ではどうしても居て貰わなくちゃいけないモノみたいなものよ。別に死んじゃってたらそれでも構わないのよ。ただ、それがはっきりしてればね。」そう言って彼女は僕の顔をしっかりと見つめた。それは冗談なんかではないぞといった風な顔で僕を少しだけピリリとさせた。

「どこで、どういう死に方をしたのか。何で死んだのかが、はっきりきちんと分かってればね。・・・ひょっとしたら、それが一番わたしにとって良いこと・・・だって死人はもうそれ以上どこにも逃げないじゃない。そんな風に思ったこともあったわ。勿論、今は生きてた方がずっと良いつて分かったけど。」

「でも、とにかく、僕は見つかって、君の構造は立ち直ったわけだ。つまり、困ったことは無くなったとっていいのかな。」

彼女は少し押し黙って何かを整理しているように宙を見つめた。

そして、再び話しはじめた。

「去年の暮れの事。大晦日の晩の事よ。とっても暖かい風が吹いていたじゃない。強い南風が吹いていて、冬だっていうのに随分と湿っぽかったじゃない？」

「ああ。憶えてるよ。」と、僕は頷いた。

「私達ね、つまり私と旦那だよ。夕方から家でテレビ見て、少しだけご馳走食べてたんだよ。ニュースで暮れの街の様子だとかが映ったり、あと何時間かで除夜の鐘だとか言ってアナウンサーが出てくる度に、今年の大晦日は暖かいですねえって話しをするもんだから。出かけようっていう事になったのよ。ほら、今年から電車、朝までずっと走るようになったのよ。大晦日だけは終電がないのよ。でね、鎌倉の八幡宮へね行ったのよ。鎌倉の駅に着いたのが元旦の午前二時からだったかしら。もの凄い混雑よ。八幡宮までの行列がホームまで来ちゃってるって感じ
でね。・・・見上げたら、夜明けは遠い筈なのに、空がずいぶんと明るく見えて、高いところを南から粉々になった春の風が霧みたいにキラキラ光りながら飛んでいくのが見えたような気がしたよ。だから、息苦しくなるほどの人群でも、とても優しく感じられたんだよ。わたし、離れないようにって旦那の腕をしっかりとつかんで歩いてた。喧噪と、どこからか聞こえてくるごおっという音が耳の中でわんわんと響いてたわ。彼が何か話しても、そのせいで良く聞こえなくて、適当にうんうんって相槌を打ってたの。夜店を照らす電球がとても眩しく思えた。そうやって、後ろから押されて、前の人につかえながら流されるように歩いていったのよ。・・・太鼓橋あるでしょ。そこ、登ったら、ずっとずっと先まで陽炎が立つみたいに電球に照らされた人の頭がうごめいているのが見えた。それで、ふと、空を見上げたの。」

彼女は話すのを止めてコップの水を口にした。

「ぽっかりと大きな満月。・・・それがね、なんでそう見えたのか分からないんだけど、わたしには、はっきりと・・・お月様、金色に輝いてたお月様がね、風に吹かれて彗星の尾っぽみたいに金色の粉、吹き出したのよ。

わたし、あっと思ったの。きれいだとか、どうしちゃったんだろうとか、そんな事考えられなかった。見た瞬間に何かを抜きとられちゃったような気持ちだったわ。

気がついたら、拝殿の前ではもう一人になってたの。後は、おしくらまんじゅうみたいに流されるだけ。いろんな声がしていたわ。多分ね、二人とも十メートルも離れてないところに居たんだと思うわ。道の端に寄って探してみたんだけど見つからなかった。一時間位、突っ立ってたと思う。結局、わたし一人で家へ戻ったわ。彼は未だ帰ってなくて、こたつに入って待ってるうちに眠っちゃった。彼、夕方になってようやく戻ってきたの。何度も電話したのに出なかった。いつ戻ってきたんだって最初に尋かれたの憶えてる。寝てたって応えると、まあ無事で良かったって言ってすぐ眠っちゃったの。

わたしね、もうその時、あなたを探しはじめてたんだよ。夢の中でまた、金色の月を見たの。夢から覚めた時にはね、わたしが探してるのが誰なんだか、まだ分からなかった。でも、幾度も探してるうちに記憶は戻ってきたのよ。そのうち、眠りがとても深くなっていったの。とにかく、

目が覚めなくなっちゃったのよ。生活が崩れてしまうほど深くて長い眠りだった。一月の中頃には、朝、彼が出かける時に、わたしが起きてるって事がなくなっちゃったし、自分も毎日の遅刻よ。そればかりか、仕事の合間にも居眠りしちゃう始末。何度も注意されて嫌な思いをして、夫婦喧嘩には不思議とならなかったけど、病院にも行ったわ。勿論悪いところなんてないのよ。でも、わたしには大方のことは分かってたのよ。何かの拍子で何かが現れてきてしまったんだっていう事がね。」

僕は深く溜息をついた。

「わたし、あなたに会いたかったんだよ。とっても必要としていた。理屈っていうか、きちんとは説明できないけど。・・・もう、わたしは渡ってきちゃったんだよ。」

そこまで話し終わると、彼女はとてもほっとした穏やかな表情になった。顔の輪郭が丸みを帯びた懐かしいそれに戻ったような気がした。

けれども、それは決して戻ったのではなかった。彼女が経験した事、彼女の話してくれた事、そのどれもは回帰と呼ばれるべきものではなかったのだ。僕は彼女に尋ねた。

「その後は？・・・そのまま？」

「ううん、仕事も辞めるしかなかったわ。旦那の勧めで神経科の病院にも行ったのよ。なんだか大きな割には頼る気分になれない病院だった。わたしの話しを聞いて、記憶のしまい方の問題だって言ってたわ。・・・どうすれば良いかっていう段になって、薬を出すって言われて、気持ちが悪くなってそれっきり行くのは止めたわ。でも、放っておいても、解決策だけははっきりしてきた。」

「僕を本当に捜し出すってことなんだね。でも、なにが問題かって事は整理されてないんじゃないのかな。・・・記憶のしまい方って、その事がさ。」

「わたしね、そのことも考えたのよ。わたしって、あなたのこと好きだったんだよ。昔ね。」僕は自分が話しはじめたことを少し悔やんで、

「僕もそう思ったた、と、言っているな。」と、付け加えた。

「でも、何をどうともしようがなかったよ。わたし達。その時にお互いの意志が同じだったとしてもね。それで、結局は何も起こらなかったじゃない。それが眠っていて、何かのきっかけでわたしに戻ってきた。そう思ったのよ、最初は。・・・でも、違うな。今ははっきりとそう言えるの。」

良く分からないと僕は応えた。彼女は続けた。

「わたしね、昔に戻りたいとかまるきり思ってないのよ。だってそうじゃない。忘れちゃってるじゃない。記憶なんて、そんな長い間暖めてたらどんどん変わってっちゃうよ。わたしだってすっかり忘れてたんだよ。それでも、あなたが暮らしてるところに居たいんだよね。なんだか、わたしが探してたのはあなただけじゃないっていう気がするの。」

「なんだか少しほっとするな。それがどういう意味だか分からないけど。」

「うん、とにかく、わたしもほっとしてる。溜まってた水が流れ出したんだもの。」と、彼女は両手を高く上げて伸びをした。

「僕はね、こないだからずっと、何かを背負わなくちゃいけないんじゃないかって、そう思ってた。正直言って少し困ることになるんじゃないかって思ってたよ。」

「ごめんなさいね。」と、彼女は言った。

僕は煙草に火を点けて深く吸い込むと長い時間をかけて煙を吐き出した。僕は昔のこと、彼女のことを思い出していた。そして、所々抜け落ちている記憶の中に、世界の事を考えていた。唐突にそんな話しをするわけにはいかないだろうと思った。まだ、僕も彼女も十分に混乱しているのだ。けれども、彼女の中で何かが再び現れたのだとしたら、それはあの時気が付いていた世界なのではないかという思いが、頭の中にぽつんと浮かんでいた。ずっと、彼女の中に世界は残っていたに違いない。彼女は過去に戻ることなしにその世界に気が付いただけなのだ。そして、だからこそ、僕はその話しをすることは出来なかった。なぜなら、幾ら昔話をしても、僕の側の世界は再生されないに違いないのだ。

問題点、は二つ在った。

ひとつは、彼女が気がついた、そして僕が知っていたらろう世界とは、それが同じものであるならば、一体何なのかということだった。

そして、もうひとつは、僕に世界が戻ってきていないという事だった。彼女は僕の前に現れ、僕と自由に話しをすることが出来る。けれども、僕は彼女の居場所を分かっちゃいないのだ。僕は僕の中のどこかに彼女がきちんと居る世界を持っているのかも知れない。でも、今、僕はそれを確信のあることとして自分に話すことができないのだ。そして、僕が彼女を見つけられない以上、ほんとうは彼女にとっての僕も見つかっていない筈だった。世界はひとつなのだ。現実にもそうであるように。

「すこし休もうか。」と、狼女が言った。

小屋を出発してから一時間経っていた。僕は自分がやや疲れてきたのを感じた。道はなだらかだったから、思いの外長い距離を歩いているのかも知れなかった。狼女は僕の方を向いて、十分に休みをとってから出発しようと言った。僕が、そんなに疲れていないと答えると、狼女は道の先を指して、こう言った。

「もう、この先で道はなくなる。なくなったら、そこからは水の中を浅瀬をたどって歩くことになる。岸はだんだんと切り立って登れない。休みたいと思っても、腰を下ろすことができなくなる。」

「浅瀬って、どの位深いんだい？」と、僕は尋ねた。

「心配しなくていい。今は水が引いているから膝より深くなることはない。」

「靴は脱いだ方がいいかな？」

「いや、裸足では滑べるから履いたままでいくんだ。もう、そんな距離はないから大丈夫だよ。」

「水が引いてるって、今、言ったね。」

「そうだ。月が向こう側の夜の真中で光っている。俺は狼女だから、月のことは一日中感じられるんだ。沼の水はもうかなり引いてるよ。この沼には満ち干きがある。まあ、逆に言うと、いつかは水は満ちてくるんだ。良ければ、出かけたいね。」

「ああ。構わないよ。」

「まあ、ちょっとした冒険だよ。」

そう大事ではないという口調だったが僕はやや不安になった。そして、僕は狼女の後に続いて沼の中に入った。確かに岸边には水が満ちている時の水位を示す線が残っていた。沼の底は固い粘土でできた一枚板のようで靴を履いていても滑り易かった。僕達は慎重に足を進めた。深さは足首を超える程度でしかなく、水底が見え、沼は遠浅になっているらしかった。それほど危険を感じることはなかった。所々で沼床が傾斜していて、僕は狼女の指示に従って狼女の肩につかまったりして進んだ。

「結構、冷たい水だね。」

「ああ。ここの水は湧き水だからな。」

「でも、海のように満ち干きするなんて不思議だな。水はどこへ逃げ込んでいるんだい。」と、僕は尋ねた。それは心配で話しかけることで不安を紛らわす子供のように、あっさりたしなめられた。

「これから、そのからくりを見に行く事になるんだ。いいから黙って追いてきな。」

水は段々と冷たくなっていくように思えた。それに、沼の水は僕達の進んでいる方向に流れているような気すらした。そうするうちに沼畔はかなり切り立った崖になっていった。足元に気をとられているうちに、その高さは優に十メートルを超えているかと思えるほどになった。崖は沼床と同じ泥の一枚板で狼女の言うように滑って登ることは全くできなかった。さらに一時間ほどはそうやって歩き続けていたと思う。前方に沼畔から二百メートルくらい離れて小さな島が見え

てきた。狼女は言った。

「あの島へ渡るけど、休みはとらないぞ。」

「ああ、分かったよ。ただ、足が冷えきってどうにもしびれてきてるよ。先を急ぎたい気分だね。」

「だらしねえなあ。一端岸を離れると、どこも浅いとは限らないからな。しっかり後をついて来いよ。」

「ああ。」

僕は言われる事なく、狼女の肩につかまった。彼女も冷えているのか、小刻みに震えているのが分かった。汗ばむほどに良く晴れているというのに、長く浸かっていると、水だけはとても冷たいのだ。僕は歯をくいしばって、後に追っていた。気がつくやうに、僕たちの歩いている幅一メートルほどの通路の左右はかなり深くなっているのが分かった。水底は見えなかった。けれども、僕は寒さで怖いなどと言っている余裕もなくなっていた。太陽は相変わらず僕たちを照らし続けていたが、着実に西に傾いていった。逆に島はなかなか近付かなかった。その島はこんもりとした樹々におおわれた、大きさが三十メートルほどの小島だった。驚くべきことに、足元の水はその島に向かって流れていた。水流は足を後ろからすくうように音を立てるほどになっていた。島のたもとでは樹々の根が網の目のように伸びていた。そして、その根の奥の方に向かって水は流れこんでいた。

僕達はやっとの事で島へたどり着く事ができた。足はしびれきっていて、感覚が消えつつあった。根の繁っている向こう側は暗くてよく見えなかった。狼女は、島に登ろうとはせず島の周りを回り込んで裏側へ出ようとした。そして、その途中で根のまばらになったトンネルのような隙間から島の中側へと入り込んだ。狼女は言った。

「ここから中にはいるぞ。最初は天井が低いから気をつけるんだ。滑べるから、木の根をしっかりとつかんで進めよ。滑べって流されたらどこへ行くかは俺も知らないからな。」

僕は大きく頷いた。僕達は入り口から差し込む光りを頼りに、木のトンネルの中をゆっくりと進んだ。僕は狼女の後ろから水流の音に負けないように大声で尋ねた。

「もっと深くなるのかい。？」

水は膝上も濡らしはじめた。流れはそんなにきつくはないのだが、水音は島の中に溢れ、逃げ場もなく渦巻いているようだった。

「いや、水はまだ吸い尽くされていない。浅くなることはあっても、これ以上は深くならない。」と、狼女は答えた。

「ほんとうかい。」

「ほんとう。」と、狼女は少しきつい声で答えた。

「もうすこしだぞ。」

数歩すすむと、あっけなく僕達は円柱状の空間に出た。暗闇である筈が明るかった。上を見上げると、天井の高いところに樹々の隙間のような穴が空いていて、僅かだけれど光りが差し込んでいた。足元の水は更に奥の方へ流れていた。丁度、三畳くらいの岩柵があって、僕達は声も掛けずにそこへよじ登ってへたりこんだ。

「やっと着いたな。おい。」

「ほっとしたよ。」と、僕は応えた。

「今日は少し水が多いな。」

「そうだろうと思った。下半身はずぶ濡れだよ。」

「そうだな。」

「とても、ここは気楽に来ようと思うところじゃないね。・・・いや、恨んだりしてる訳じゃないよ。恨んだりしてない。」と、僕はつけ足すようにつかえながら言った。

「だから最初に言っただろう。」狼女は歩いていた時とは違って、やや疲れた口振りで（その代り、眠ってしまいそうな柔らかな微笑みを見せながら）言った。

「でも、なかなか面白いハイキングだった。」

狼女は流れている沼の水を見て、ふうと溜息をついて応えた。

「本当に、この事を知らないで蛍石を採ろうと思ってたのかよ。」

「ああ、第一、ここへ来ようと思ったのでさえ昨日の事なんだ。」

僕はパンツまでぐっしょりと濡れていた。不思議と水の中を歩いていた時の寒さはどこかへいつてしまっていた。そうかといって、その空間が取り立てて暖かいわけではなかった。僕は慣れてしまっていたけれど、得体の知れない緊張感の中に居た。それは、上官に言われるままジャング

ルの中を何日も歩き回っている下っ端の兵隊のような気分だった。大方のことは諦めていながら、どこかしらぴんと張り詰めた緊張が頭の隅に残っていて小さな金属音に瞬時に反応できるような、そんな感じだった。

しばらく二人とも黙っていたが、狼女が話しかけてきた。

「教わったって言っただろう。ここの事。」

「ああ、きれいなところだってね。でも、それだけだよ。”きれいなところ”ってのは大当りだった。番人が居たってのは大外れ。」僕はそう言って狼女を指さした。

「それで、ここのこと教えてくれた人ね、トリさんっていうんだけど、トリさんと、彼女と、僕とで昨日の晩に飲んだんだ。彼女って、さっき話した女の子のことだよ。結局、彼女は僕の住んでる街に来ちゃったんだよ。僕はそんなに強くないし、ビール以外は滅多に飲まないんだけど、昨日の晩はウイスキー飲んでた。僕の家で食事した後にね。．．僕の家は海に見える高台の端にあってね。そこから月に照らされてきらきら光ってる海を見ながら飲むのってとても良い気分なんだ。昨日の晩もとても楽しく飲んでた。別段騒いだりしなくてもね。でも、彼女、突然言ったんだ。ここは良いところだって。それから、僕の家に来たいなって言った。そしたら、みんな大分酔ってはいたけど急に黙っちゃった。それで、急にトリさんがおびとおげ行ってこいよって言ったんだ。その時、蛍石っていう透き通った緑色の珍しい石があって、それが手に入ったら、ヒロコちゃん、ここへ来ていいよってね、トリさんが言ったんだ。僕はそれには、何とも答えなかったけど。」

その晩、僕はかなり酔ってはいたけれど、沈みこんでしまうことの出来ない自分に気がついてた。夜が明けるまで、僕は繰り返し、咽がからからになる位の深く短い眠りと、目の前にあるんじゃないかと思える程にはっきりと見える天井の間を往復し続けた。僕が起き上がった時は、強い太陽の光りが、庭に面した部屋を照らしはじめる直前だった。やがて、その光りが彼らを起こしてしまうに違いなかった。僕は幾らかの食糧や気の留まったものをザックに詰め込んで駅へ向かった。テーブルの上には、今日中には戻ってジャンゲに立ち寄るということ、ジャンゲまで僕の車で帰ってくれるようにと書いたメモを残しておいた。

「ともかく、ここへ来ようと思立ったのは昨日の晩、っていうより今朝なんだよ。」

「お前の姿を見つけた時に、すたすたと歩いてはいるけど、なんだか迷ってるように見えたのも外れって訳じゃないな。まあ、ハイキングっていう風には見えなかったよ。」

「いや、そんな事はないんだ。まあ、何しに来たかって聞かれると困るけど、僕は気分をリフレッシュさせようとは思って来てるんだよ。でも、それって列車を降りた時に叶っちゃったみたいだけどね。それでも、ここに来たお蔭で、かなり分かるようになったと思うよ。少なくとも、君のお蔭でかなりいろいろなことが整理された。」

「そう？」と、狼女は言った。

「ねえ。僕は君にかなり感謝しなくちゃいけないと思ってるんだよ。．．．その、つまりさ、ずっと付き合ってきてくれてるけど、これって随分と大変な事だろう。こんな思いまでしてさ。」

「まだ、大変な思いは終わった訳じゃないけどな。」

「でも、まあ、いいんだ。ともかく僕は感謝している。」

狼女は少しの間黙っていたが、話しはじめた。

「要するにだ、俺が一体何者なのかって事だろう？こんな格好もしてるからな。」

「いや。そういう事じゃないんだ。僕は言ったと思うよ、そんな事は聞こうとは思ってないって。」

「俺にも全てを説明することは出来ないんだ。ただ、間違いなく、俺はここの番人なんだよ。でも、誰かに頼まれたり、それで食いぶちをあてがって貰ってる訳じゃないが。俺は自分のために番人をやってるんだ。誰にも会わないようにひっそりとな。お前の事だって本当は放っておけば良かったのかもしれない。」

「でも、呼び止めた。」

「自分でも良く解らないんだよ。いつも通りに見過ごす事も出来た。ただ、お前は俺のことを救ってくれるような気がしたのさ。」狼女ははっきりと、そう言った。

(その時僕は思っていた。わかるとか、わからないとか、そういうことじゃないんだと)

「救う？」と、僕は尋き直した。

「ああ、そうだ。」

「何から？」と、僕は言った。

「いや、俺は別に誰かから酷い目に会わされているとか、拘まっているとかいう事はない。もし、俺をここに拘かまえているとしたら、それは俺自身だ。俺は当りに自分をここに継ぎ留めているだけだ。そうじゃないんだよ。救われるっていうのは。確かに、お前は何かの鍵に違いない。けれども、それを使うかどうかは、誰にも決められないんだ。」

「いいや、僕に何かが出来るとなら構わないで言って貰いたいよ。」

狼女はふっと笑った。

「いや、俺がそういう話しをしたからといって、お前に助けて貰うつもりはないから心配するなよ。それにな、お前の事はお前が決めるべきなんだ。詰まるところさ。」そう言うと、狼女は微笑んで、続けた。

「まあ、分かれば頼めるんだけどな。その気持ちだけで嬉しいよ。」

僕は何とも応えようがなかった。

空間の上の方から差し込む光りの筋は、そうしている間にも徐々にその向きを変えて、陽が傾いてきている事を示していた。狼女は「さて」と、立ち上がって言った。

「それじゃ、石を採って、ここを出ることにしようか。」

水の流れは、ほぼ止まっていた。

「お前の座ってる岩が大きな蛍石の塊だよ。こいつは結構もろいから、出張りをひっぱたくと砕き採ることが出来る。」

僕はそう言われて、自分の座っていた岩を見た。表面は艶がなく赤茶色でとても脆そうには見えなかった。僕は足でたんと岩を踏み蹴ってみた。

「何か、固い金物はないのか？」と、狼女は言ったが、あいにくそんな金槌のようなものは持っていなかった。僕はどこかに石でも転がっていないかと思ったが、あればとっくに流されているに違いなかった。

「せっかく苦労してきたのに、弱ったもんだな。採れないで帰るなんてね。」

「全く、間抜けな話しだ。」と、狼女が呆れた顔で言った。

「まあ、仕方ないね。」と、僕が応えると、僕の腕を指して狼女が言った。

「おい、お前の時計、それ頑丈そうだな。それでひっぱたいてみたらどうだ？」

「こんなもので割れるかい？」

「やってみないよりマシだろう。」

別段大事な時計という訳でもなかったから、僕は時計を外して、それを靴にはめると、力一杯岩が少し出張っているところを蹴り下ろした。三度目に、ピシッという音がして時計の硝子が砕けた。それでも岩は何ともなっていないようだった。僕は更に何度も岩を蹴った。狼女ははじめ黙って見ていたが、僕が一息つくと、「これは望みがあるぞ」と言って、岩の出張りに手をあてた。

「お前、オイルライター持ってただろう。」

「ああ。」と言って、僕はライターを取り出して渡した。

狼女はオイルを少し絞り出して岩の上にたらすと、火を点けた。火はゆらゆらと洞の中を照らして、数十秒ほど燃え続けた。燃えている最中にピシピシという音が岩からでた。

「蛍石は火に弱いんだ。」と、炎を眺めながら、狼女は言った。

洞の天井が影のように浮び上がったのが見えた。土の助けを借りずに、お互いを支さえあうために絡み合っている根の姿があった。炎が消えると、狼女は水をかけてから力を込めて岩を蹴った。あっけなく、十五センチ位の大きな蛍石がもぎ採れた。石の断面は微かな光の中でも透き通った緑色をしているのが分かった。

「良かったよ。それはかなり良質な蛍石だ。と、狼女は言った。僕は小さく砕けた数個の蛍石も一緒にザックの中に収まいこんだ。

「何だか、採ることが出来てとても良かったような気がするよ。ありがとう。」と、僕は礼を言った。

狼女はそれには応えずに、もう一度水に手を浸けて、やや難しい顔をしていた。僕はどうかしたのかと尋ねた。彼女は僕の方に向かって真剣な顔つきで言った。

「少し冷たすぎるような気がする。今日は、いつもより水が冷たいとは思っていたんだけどな。」

早いとこ、岸に還った方が良いかも知れないぞ。」

「まさか、泳ぐなんて事になるんじゃないだろうね。」と、僕は言った。そんな事を言われると、暗闇の中に居る不安がどんどん膨らんでいった。なにしろ、僕はそんなに長い距離を泳ぐ自信が無かったのだ。

「心配するな。少し急いだ方が良いかも知れないってだけだ。」

僕達はともかく、再び水に入り、洞の外に出た。水は刺すように冷たく、沼水は腿の付け根を濡らした。島から岸までは二百メートル位だった。しかし、狼女は島の外へ出ると周囲を見渡してから僕の方を向いて言った。

「元来た道へは戻らない方が良いかも知れない。岸までは行けても、そこから岸伝いに歩くのは無理だろう。こんなに速く水が上がってくるのははじめてだ。それに、太陽が回るのも今日は恐ろしく速い。ともかく速く沼から上がることにしよう。」

だからといって僕はどうしようとも言えなかった。最も僕の返事なんか聞くことなしに、狼女は「逆の岸へ向かうぞ。」と繰返し、来た時とは反対側の岸に向けて歩きはじめた。僕は黙って後に続いた。狼女は左右の対岸の景色を見較べながら自分の位置を確かめて進んでいるようだった。程無く、僕達は腰の上まで水に浸かるようになった。けれども対岸は思いの外速く僕達に近付いてきた。狼女は時折振り返ると、さっきより少し遠いだけだと僕を励ました。風は止んで鏡面のような沼の真っ只中に、僕達はぽつりと取り残されて、沼の隅々まで届こうかという波紋を立てながら歩いた。後岸まで二十メートル程になったところで、僕達は首まで水に浸かってしまう深みに入ってしまった。体はぶるぶると震えていた。その深みは岸辺近くまで続いたのだが、気が付くと、立ち上がれば膝ほどの深さの浅瀬を僕達は四這いになって進んでいた。もう、震えで立ち上がることすら出来なかったのだ。僕達は砂浜を這って登り、岸辺の草群に倒れ込んだ。対岸には切立った崖はなかった。狼女が沼を見ながら低い唸り声をあげた。沼の水は僕達の目の前で、その水位を増やしつつあった。どれ位の間、それを眺め見つめていたか分からない。僕達が這ってきた砂浜があらかた水に隠れてしまうと、狼女が倒れたままで僕に言った。

「済まなかったな。どうししまったのか、俺にも分からない。もう少しで溺れるところだったな。」

「いいんだ。」と、僕は応えた。

「あぶない目に遭ってるのは君も同じだ。」

僕達はがたがたと震えていた。不思議と回復は僕の方が早かった。

「火を起こした方がよいよ。」と、僕は言った。

「ここで火を焚こう。でなきゃ二人とも凍えてしまうよ。」

ここで火を焚くのは許されないのかも知れないが、僕は狼女の了解を取ろうとは思わなかった。狼女はかなり衰えているように見えたのだ。僕は辺りを見回して燃やせそうな倒木を見つけた。枝を折り、集めた。狼女は寒さに震えながら何かを言いたそうにこちらを見ていたが、黙って寝転がっていた。僕はオイルライターで枯木に火を点けた。貰い物のオイルライターは完璧な耐水性で、苦労なく火が立ち上がった。煙がやや多かったけれど、しんとした沼の畔で、勢いの良くぱちぱちと木の燃える音が森の中へ吸い込まれていった。僕はどんどん枯木をくべた。僕は狼女にもっと焚火の近くに寄って暖まるように言った。真っ白になっていた顔がやがて赤味を取り戻しはじめた。

「倒木の手前の木があるだろう。」と、狼女は僕に幹が白い木を教えた。

「かさしろだ。あの木の枝を採ってくるんだ。」

「いいのかい？生きている木だよ。」と、僕は確かめた。

「いいから早く。」と、狼女は答えた。僕は言われた通りにかさしろの枝を折ってきて焚火にくべてみた。炎の中に投げ入れられた枝を見ていると、その白い枝の表面のひびの中からクリーム色の濁った液体が滲み出てきていた。その液体はおそらく油の一種であるらしく、出てくるとぶくぶくと沸騰し、紅い色の炎となって燃えはじめた。あっという間に焚火の炎は身の丈ほどの高さになり、僕達の体を強く熱しはじめた。かさしろの細い枝を一本くべるだけでも、かなりの熱と炎が加わった。炎が落ち着くと、僕は狼女に声を掛けた。

「大丈夫かい。本当に冷え切ってしまったからね。何だか、僕のせいでこんな風になってしまったんだからね。」

「俺はこの位でへたったりしないんだけどな。」と、狼女は答えた。「でも、おかげで、大分暖かくなってきたよ。もう少しこのまま休んでいれば大丈夫だ。」そう言うと、狼女はもう一度目を閉じて眠り入ってしまった。

僕の服は強い炎に照らされてすぐに乾いてしまったが、おそらく体毛のせいだろうか狼女の服の乾きは悪かった。僕はかさしろの枝を炎にくべ続けて、火の勢いが弱まらないように努めた。そのうち山の端に陽が落ちていき、炎の揺らぎだけが時を刻むまっさらな闇がやってきた。そして、いつのまにか僕も座ったままで眠りに入ってしまった。

狼女の声に起こされた時には空からはほのかな残明も無くなっていた。狼女は採ってきた蛍石のひとつを火に投げ入れるように言った。

「火に弱いって言ってたね。この石。」

「そうだ。」狼女はかなり回復してきたように見えた。

炎の中に投げ入れられた蛍石はピシピシという音を立てて割れはじめた。僕達はその音を黙って聴いて炎を眺めていた。すると、蛍石は割れながら青白い光りを放ちはじめたのだ。炎の紅い火とは較べられないほど弱い光りだったけれど、石全体が光っているのが分かった。その光りは、焚火の熱を吸い取ってしまうんじゃないかと思えるような冷たい色の光りだった。見とれているうちに焚火の炎は小さくなってしまったが、その光りは強くなりもしない代わりに弱くもならなかった。僕はその小さな光りに呑み込まれてしまうような気がした。そして、狼女に言われて僕達が渡った島を見遣ると、島全体が蛍石と同じ青白い光りに包まれていたのだ。島の光りは僅かだけでも空に吸い上げられているように見えた。狼女は言った。

「不思議な光りだろう。採ってきた石を火にくべると、それに合わせて島も光るんだ。何でそうなるのかは分からない。もちろん、この沼には分からないことが沢山ある。ほとんどの事には何かしらのからくりが有って、石が坂道を転がり落ちていくように終わっていくだけだ。でも、この光りは違う。からくりだとか、因果だとか、そんなものはない。それは始まりでもなければ終りでもないんだ。許されるのはそういう事実を受け入れることだけだ。それを真実って呼ぶ事も出来る。あるとすれば真実ってのはあんなもんだってな。あれを見るとほっとする。たぶんそれはそのせいだろう。」

僕は黙っていた。島は光り続けていた。その青白い光りは他の何かを照らすような強さではなく、かろうじて自らの存在をのこすだけの光りだった。狼女は起き上がってかさしろの枝をくべたした。紅い炎が再び僕達を照らしはじめた。もう乾いていないのは靴ぐらいだった。

「こんなに木を燃やしちゃっていいのかい？」と、僕は尋ねた。

「ああ。かさしろだけはな。油分の多い木なんだ。こいつのお蔭で、俺も冬を越せるんだ。草は抜いちゃいけないが、この木だけは少しくらい折っても根こそぎ採ってしまわなけりゃ大丈夫だ。匂いがちょっとばかりきついけどな。」

二人で枝をくべ続けたので、炎は僕達の身の丈程までに大きくなった。投げ入れた蛍石は砕け続けていた。僕は残りの蛍石をザックから取り出した。

「これも入れちゃって構わないかい？」と、僕は言った。

狼女は意外な顔をしながら答えた。

「石は俺のものじゃあない。ただ、入れたら石は粉々になってしまうぞ。お前、石を持って帰らなくちゃいけないんじゃないかったのか。」

「ああ、そうとも言えるけど、どっちでもいいんだ、それは。別に細かくなっちゃっても構わないよ。でも、あの光りは持って帰っちゃいけないような気がするんだ。あの光りだけはここに置いていかなくちゃいけないような気がする。」と、僕は答えた。

「そうか。好きにすればいい。」狼女は少しだけがっかりしたような顔で言った。

僕は一番大きな蛍石をザックから取り出すと炎の中にそっと投げ入れた。

見る間に石は砕け、光りを放った。それは弱々しい光りではなかった。辺り一面を青白く照らしきってしまう位に強い光りだった。まぶしすぎて僕はその光りをまともに見ていられない程だった。

「なんて強い光りだ。」と、狼女が言った。

かさしろの紅い炎もかき消されてしまっていた。そして、体がその青白い光りに照らされて冷えていくのが分かった。地面が揺さぶられているような感じがした。島はどうなっているのかと振り返ろうとしたけれど、体がこわばって動かなくなっていた。狼女はヴーッという低いなり声をあげた。僕も何かを言おうとするのだけれど声にならなかった。それなのに、僕は目を大きく開いて捕まえられたように蛍石を凝視し続けていた。それがどの位の間続いていたか分からない。気がつくまで僕と狼女は大粒の涙をぼろぼろとこぼして、消えかかったかさしろの炎を見ていた。

何と言って説明すればいいのか分からない。何が起こったのだから分からない。けれども意識の戻った僕の頭の中には激しい、それまでに感じたことのない激しい意志が忽然と現れたのだ。それは、意志というよりも、まるで命令の書かれた紙片を突き付けられたと説明した方がふさわしかった。

「すぐに帰らなければいけない」

それは、その文句以上の何ものでもない代わりに、絶対的な重みを持っていた。

だから、僕はすぐにここを発たなければならなかった。

「くそっ、今日は一体どうなってるんだ。」と、狼女は言った。そして僕の顔に気がついた。

「なんだ、おい。お前、洗われちゃったな。こんな強い光りははじめてだけど、大丈夫か？」

「平気だよ。ちょっとの間、気を失ったみたいだ。で、気がついたら、その、帰らなくっちゃいけないっていう気がするんだ。」

「やれやれ、帰りたくなっちゃったって訳かよ。」

僕達は、ついでに乾き切ってしまった。一生懸命喋っているつもりでも、咽がひゅひゅう音を出すような声にならなかつた。それでも、狼女は二、三度分かったというふうに頷くと、僕の方を向いて言った。

「帰るっていっても、今は無理な相談だぞ。出来ないって訳じゃないが。」

「すぐ、帰りたいんだ。帰らなくっちゃいけない。」

「もう、沼は渡れない深さになっている。こっちの岸伝いに戻るには深くて切り立った谷を幾つも超えなくてはならない。」

「岸沿いには行けないのかい。」

「この先は俺達が歩いてきた岸より高い崖になる。悪いことは言わない。夜に動くのは危険すぎる。」

僕は、しばらく狼女の目を見ていた。狼女の目も僕を威圧するわけではなく諭すような静けさで応えていた。狼女は言った。

「それに、戻っても、列車は夜には走っていない。」

「線路伝いに歩いてもいいんだ。」と、僕は小さな声で言った。

狼女は苦笑いしながら続けた。

「残る手は、ない、と言いたいところだ。聞いた話しだが、山を超えれば海に出る。この沼を背にして山を三つ越えると海に出るって聞いた事がある。海ペリには、お前の街がある筈だ。」僕はザックの荷物をまとめた。なんだか、すぐにでも歩きださないと、体の中が疼いて気分が悪くなるような気がした。

「案内は出来ないぞ。」と狼女は言った。それでも構わなかった。おまけに、気分はどんどん悪くなっていった。それは歩きはじめると止まるような気がした。僕は吐く前に歩きはじめたかった。僕は狼女に言った。

「ここまで色々面倒をみて貰って悪いけど、」と、僕は立ち上がった。「ほんとうに有難う。でも、山を越えてみることにするよ。」

「そうか。俺はここで朝まで火を焚いていてやるよ。どこかからこの火を見つけることが出来るかもしれない。少しは目印になるだろう。森へ入ったら、ともかく火から遠ざかるように上へ上へと登るんだ。どこかで道に出る筈だ。その道を登る方向に行け。あとは俺にも分からない。ともかく超える山は三つだという話しだ。」

「有難う。」僕は持っているタオルを沼の水で濡らしてビニル袋へ入れた。この先水場はないかもしれない。狼女はかさしろの太い枝を五本だけ僕によこした。

「これは松明の代わりだ。本当に暗い時だけ使うんだ。」

「ああ。分かった。」

「おい、あれも持っていけよ。」と、狼女は炎の中で未だ少しだけ光っている蛍石を指さした。僕は砕けて小さくなっているu石を出来る限り木の枝を使って集めて沼の水で冷やしてからザックに入れた。立ち歩いているだけで気分の悪さはかなり紛らす事が出来た。

僕は別れ際に狼女に手を差し出した。握った手は僕よりも大分暖かかった。僕は沼を背にして森の中へ踏み入った。森の中は暗く、すぐにでも松明が必要になった。足元は草深かったが、足が草にまとわりつく事もなく、僕は上へ上へと進んだ。振り返ると焚火は樹々のはるか向こうで小さくなっていった。やがてそれも見えなくなると、僕は闇の中を宙に浮いてもがいているだけのよう気分になった。命取りになるのか？という考えが頭の中に浮かんた。けれども怖くはなかった。月は頭上近くまで昇っていた。登りはきつくなり、僕は樹々に手を掛けながら斜面を登り続けた。道はなかなか現れてくれなかった。焚火にあたって一度は乾いた服が汗でぐっしょりと濡れていた。呆れるほど何もかもが動かない樹々の中をふんわりとした風がそよぎはじめたのに気がついた。斜面には岩が目立つようになり樹が途切れはじめて、僕はあっさりと山の頂に押し出されてしまった。結局僕は道を見落としてしまったようだった。

山の頂上からは沼を見下ろすことが出来た。かなり登ったつもりでも沼は未だすぐそこに見えていた。焚火はどこにも見あたらなかった。振り返って、進むべき方向を眺めれば、そこには更に高い山並が月に照らされて続いていた。その山並に続く尾根道が足元から延びていた。僕は休まずにその道を歩き続けた。荒れて小石が多く暗い中では歩きづらい道だったが、時折現れる岩場で迷うことさえなければ、僕は道がどちらに続いているかで悩まされることはなかった。

登っている間、僕の頭の中にはジャンゲの店の様子が湧き水のように思い出されていた。番号札

のついた帽子をかぶったままで朝飯を食べる市場の男達あふれる朝のジャンゲ。閑散とした午後のジャンゲ。焼き魚の油の匂いが残っている店の中でトリさんがこっちを向いて笑っているジャンゲ。

そして、僕は裏口から見える港の海面を眺めていた。海はゆらゆらと膨れあがっては引いていた。それから、僕は激しい雨に叩かれている店の前の道を見ていた。車がしぶきを上げて走り去って行った。生姜のスープが目の前にどんと出された。気がつくやうに、店の中には僕ひとりを取り残されていた。不思議と、僕は随分落ち着き払って、皆はどこへ行ったのかと心配していた。僕は生姜のスープを一気に飲み干した。そして、ことりとスープ皿を置くと、入口には狼女が立っていた。僕はとても嬉しくなって椅子から立ち上がった。

「きてくれたんだね。」

「ああ。無事に帰れたか気になっていたんだ。」

「よく、ここが分かったね。」

「そんな事は簡単。俺はここに来たことがあるからな。」

「えっ、そうだったの？でも、そうだったらそう言ってくれればよかったのに。」

狼女はにやりと笑って「まあな。」と、言った。

その次の瞬間、狼女は消えてしまっていた。雨が激しく降っていた。通り過ぎる車の跳ね上げる水が店のガラス窓に塊になって打ちつけていた。反対に僕は乾き切っていた。このまま放っておけば手足の先の方からしわくちゃなミイラになってしまえるのじゃないかと思えた。急に雨音が大きく店の中に入り込んできた。ドアが開けられたのだ。そこにはヒロコが立っていた。彼女は全身ずぶ濡れのまま、店に入らず突っ立ったままこちらを見ていた。僕は早く店の中に入れよと言った。けれども彼女は首を横に振って僕を見つめて言った。

「ヒナタさんこそ早く出てきてよ。」

けれども、僕は、そう言われてるのに自分でも意味の分からない言い訳を懸命にして椅子に座ったままで居るのだ。そして、最後に僕は何度も繰り返してこう言っていたのだ。

「そこは何処なんだい？トリさんは戻ってきたのかい？」

僕は馬酔木のトンネルの道を歩いていた。馬酔木が月の光りを遮っていたお蔭で、僕はかさしろの火を頼りに歩き続けた。体はかなり重くなっていたが反対に頭の中は極度に緊張して冴えわたっていた。気分の悪さや体が疼くような感じは消え去っていた。

僕は「だって約束したじゃないか。」と、言っていた。

確かに僕はそう言っていた。約束をしていたと。

約束？

突然僕の耳の中に別の台詞が飛び込んでくる。

「一時って約束してた。」

一時？

勝手に言葉が現れては消えて行った。けれども、僕は約束をしていた。約束の時間は一時だった。約束って一体なんだったんだろう？僕はそんな約束をいつしたんだろう？そして、僕はどこへ行けばいいんだろう？

二つ目の山頂に着いた時、僕はくたくたになっていた。タオルを絞って水を飲んだ。岩の上にへたり込んで残っていたチョコレートを全て食べてしまった。月の光りはその明るさを増していたんだけど、沼はどこにも見あたらなかった。全ての物事が終りかかっているか、でなければ始まるようとしているような気がした。少し眠りたくなり、横になった。心臓がこくんこくんと脈打っていた。随分長い間そうしていたけれど、約束について思い出されることは何もなかった。ただ、僕が今まで忘れてしまったことを思い出す時に感じるような責められたり迫られたりするような気持ちには不思議とならなかった。どう説明したらいいか解らないんだけど、むしろ、忘れることによっておもいだされるような、そんな気がした。

つまり、僕は世界の中に戻りはじめているのかもしれない。だとするなら、僕が真実（敢えて、そう呼んでしまおう）を受け入れられるようになってきたのかも知れなかった。自信はなかった。けれども、詰まるところ、真実とはそういうものなのだ。真実は理解されるような構造なんか持っていないのだ。月並みだけど、真実に関して言えば、辛うじて出来るのは受け入れることだけなのだ。それは人が死に逝く事に似ている。そして生まれ来ることに似ている。

そして、僕は帰るのだ。

そして、彼女はそこに居るのだ。

月は沈みつつあった。僕は再び歩きはじめた。

最後に超えることになる筈の山は険しく高い山だった。僕の住んでいる街の近くにこんな高い山があったかと思うくらい厳しい登りだった。松明を頼りに立ち足かかる岩壁にかじりついて、僕はひたすら登る事だけを考えた。とても素人の近づく山とは思えなかった。闇でなければ下を見て足がすくんだかも知れなかった。やがて薄明がやって来た。大気は澄みきってりんとして動かず、目の前には先細りの岩肌が天を刺していた。良く考えてみれば、僕は峠さえ越えれば良か

った事に気が付いた。何も無理をして目の前にそびえ立っている鋭角的な嶺のてっぺんを越える必要なんか無かったのではないか。最後の山は、それまでと違って孤立した嶺だった。回り込めばもっと低い峠越えをするだけで海に出られる筈だった。けれども、僕は山を越えてきたからこそ、行き先を見失わないで来れたのかも知れなかった。僕は最後の山の頂をきちんと越えて行かなければならないのだ。

けれども、最後に岩壁が僕の行く手を阻んだ。その一枚岩の壁は左右へ回るほど切立っていて、オーバーハングしているように見えた。僕は十分に明るくなるのを待って、比較的楽そうな正面から岩壁に取り付いた。靴を脱いで裸足になり、いつかテレビで見た岩登りの真似をして一足、一手を順繰りに動かして壁を登った。結果として僕は垂直に近く感じられる壁を二十メートルばかり登ることになった。岩壁を登っている途中で、振り返ると下の方に越えてきただろう山並みを見下ろせた。けれども、山の影に隠れてしまったのか、沼を見ることは出来なかった。遠くを眺めると、孤立した嶺に見えたこの頂きも距離が隔たってはいるものの、連なる稜線の中にあるようだった。頂上に出る直前にちょっとした座敷のような棚があり、そこから勢いをつけて二メートルほどの岩に飛びついて登ると頂上に出た。

海側の山容は、僕が登ってきた側とはがらりと違っていた。山頂の向こうは崖ではなかった。そこには緩やかな裾野が拡がり、裾野の先には海が静かに横たわっていた。裾野は鮮やかな緑に包まれていた。それは、クレーターの内側からやっとの事で這い上がって縁に立った途端に街のネオンサインが見えたような、と言ってもよかった。そこには朝の森があった。

僕はようやく越えるべき山を全て越えたのだ。

夜も明けて空は星の见えない明るさになっていた。不思議と、そう言えば星を見た記憶がまるで欠けているのに気が付いた。思いの外、僕の夜は明るかったのだなと思った。そして、僕の夜の外側はほんとうの闇だったのだ。

山頂にへたり込んで休んだ。眠気は感じなかった。かなり長い距離を歩いたのだろうか、それとも最後の岩場だけでこうなったのか、足には血豆ができていて、どれもが潰れてしまっていた。頂上の岩には測量の標識が頑丈に埋め込まれていた。水平線にかかる雲に隠れて太陽の姿はまだ見えなかったけれど、海は鈍く光っていた。そして、遠い左手の海岸に僕の還るべき街が見えていた。

下山道はすぐに森の中に潜りこみ、沢筋の道となった。僕は重力に任せてなだらかに続く道をどんと降りて行った。やがて、営林署の看板が何本か現れると、道は車が通れるほどの幅の広い砂利道になった。鳥のさえずりや小川のせせらぐ音が、静かに森の中に滲みこんで、目覚めの生気が辺りを包んでいた。太陽は森の端から顔を出して僕を照らしはじめた。とても暖かい日差しだった。

昼を過ぎていただろう頃、吹きはじめた風に汐の香りが匂うようになり、通行止めのバリアが現れた。だいぶ、暑くなっていた。そして、バリアの向こうに、懐かしい海がゆらと揺れていた。国道をしゅうという音を立てて車が走ってゆくのが見えた。僕は輝く海に向かって走っていた。アスファルトの照り返し。水色の空。眩しくて夏が帰ってきたような海辺。そんな当たり前の海岸の景色がくっきりと僕の目に映しこまれていった。

そして、僕は国道を渡り防波堤を乗り越えて、岩浜へ降り立った。疲れていた。僕は浜辺の岩の上へ座り込んで、ただ波がきらきらと光るのを眺めた。

大学生のような若いカップル達が車を降りて海辺へと降りてきた。彼らは僕がそこに居るのにほとんど気が付かずに大きな声で喋りながら通り過ぎて行った。ふと自分の姿を見ると、ズボンに泥だらけで、腕のあちこちに擦り傷があった。手の爪の所々から血が滲んで固まっていた。シャツにも黒く固まってしまった血があちこちについていた。彼らが、車に戻ってきたところで、僕は時間を尋ねた。背の低い男が十一時十二分だと答えた。約束の時間は一時だった。僕は歩きはじめなければならなかった。街までどの位の距離があるのかは分からなかったが、僕には見慣れない海岸線だったから、相当遠いのかも知れなかった。それでも僕は、照り返しの強いアスファルトの上を歩きはじめた。意外なほど僕の足取りはしっかりしていた。数分歩くと、バス停が現れた。バス停の看板の行き先には僕の暮らしている街の名があったが、次のバスは三時過ぎにここを通ることになっていた。バスに乗れないことよりも、この道の先に終点があることがありがたかった。僕は、少し小走りになりながら歩き続けた。

車通りはさして多くなかったが、乗せて貰うことを考えた。もっとも、そのなりで乗せてくれる車があるかどうかは別だった。何十台かが僕を素通りしていった。僕はいよいよ本気になって走らなくてはならないのかと思った。若い頃に自転車でなら一日に三百キロ近くを走ったことはあったが、全くの足だけで長い距離を走ったことはなかった。それに、足は既に血糊でぬるぬるしていたから、そう長くは保たないだろうと思えた。

停まってくれた車は野良仕事からの帰りだろう小型のトラックだった。僕は荷台で構わないから乗せて貰えないだろうか頼んだ。黒く陽に焼けた中年の運転手は、はじめ何も言わずに僕の姿をじろりと見たが、「乗れよ」と、ドアを開けてくれた。トラックはいつ分解してもおかしくない程くたびれていたが、唸りをあげて勢いよく走りはじめた。聞くと、街まで農具を買いに行くのだと答えた。景色は恐ろしく速く後ろへ流れて行き、計器盤の時計の針の動くのも速く感じられたので、僕は少しだけ混乱した。

男はほとんど話しをせずに煙草を吸い続け、エンジンの唸りに負けない程の音量でラジオをつけていた。天気予報が終り、正午になるとニュースがはじまった。何の気なしに聞き流したアナウンサーの声に、僕は唾をぐいとのみこんだ。

「九月二十七日、水曜日のお昼のニュースです」と、ラジオは言った。

僕が街を発ったのは日曜の朝だった。そして、今日は月曜ではないのだ。僕が出発してから三日が過ぎた事になっていた。それがどういう事なのかは分からなかった。僕は試しに昨日の天気を男に聞いてみた。ここ二、三日、こっちはどんなお天気だったんですかと。

「おとといは土砂降りの雨だったけど、昨日今日は晴れてるよ。」と、男は答えた。

僕はそれ以上何かを尋ねることはしなかった。逆に尋ねられるのはこっちの方なのだろうし、僕はこうやって無事帰ってきているのだ。ふと、ジャンゲが無くなっているのじゃないかという不安が頭をよぎったけれど、そんな事は考えても無駄だと思った。それよりも、今日が水曜日だということが、頭の中で少し熱を帯びていた。それは、おそらく約束の時間が「水曜日の午後一時」だという事を意味しているのだろう。僕は水曜日の午後一時を目指しているのだ。

二つの見覚えのある集落が窓の外を流れていった。街に入ると僕は駅前の銀座通りで車を降りた。礼を言うと、男は「じゃあ頑張れよ」と言い残して走って行った。見覚えのある街並がいつもよりも少しだけ輝きを増したように思えたけれど、それは僕がここを発った時と全く同じ景色だった。その事は僕を少しだけ安心させた。

とりあえず、僕はジャンゲに電話をかけてみる事にした。呼び出し音が鳴っている時に、パチンコ屋の宣伝カーがスピーカーのボリュームを一杯にあげて通り過ぎた。軍艦マーチに呼び出し音の震える音が吸い込まれてしまい、僕は受話器を持つ手を緩めてそれを見送った。宣伝カーが角を曲って街の音が戻ってくると、受話器から「もしもし」という声が聴こえてきた。トリさんの声だった。

「あ、もしもし。ヒナタです。今、帰ってきたところです。」

「どこ行ってたの？三日も。」

「ええ。まあ・・・今、駅前に居るんですけど、これからそっちに行きますから。」

「心配してたんだよ。」

「すみません。とにかく、そっち、行きますから。・・・あ、それから、蛍石、砕けちゃったけど採ってきましたよ。」

「えっ？なあに？」

「あっ、いえ。それと、トリさん、ヒロコちゃんいますか。」

「あ、いるよ、出そうか。」

「いや、いいんだ、トリさん。ただ、言ってくれないかな、一時には間に合うって。」

「一時かい。……」

電話の向こうはいつもより客で賑わっているようだった。

「もしもし、あのね、なんだかよく分からないけど、今日は水曜日だからねって言ってるよ。」

「ああ。ほんと。……それじゃ、すぐ着けると思うから。」

そう言って僕は電話を切った。

僕はザックを背負いなおして再び歩きはじめた。

(おわり)